



329
794



始





高野の義人

中里介山著

大正
11. 4. 15
内交

改訂出版にあたりて

この小説は明治四十三年に書いたもので、その當時、都下の人気を集めたものであつたが、読み返して見るとお恥かしい處のみ多く、そのまゝでは公けにして置くの勇氣が失せたから初版限りで絶版し、その後、出版の話もあり、読みたいといふ希望者もあつたが、それなりにして置いた處、今度、磯部甲陽堂が出版して呉れるとの事で、此の機會に一氣に全部を書き直してしまつた。

書き直したとは云ふものゝ、性質に於て變りはなく、多少のアクが抜けたといふに止まるだらうと思ふ。筆を取つてゐるうちに冷汗淋漓たる處が多かつたが、間々意を強うする處もないではなかつた。

一篇の骨子は一種の義民傳ではあるが、寧ろ作の中心は人間の精進と愛慾の悩みと云つたやうな處にある。治者と被治者の階級の争ひは此の世に絶ゆることがあつても、愛欲の悩みは人間から絶ゆることはあるまい。この意味に於て義人その者よりも篇中に現れた良道といふ修行僧の悩みに人間の絶叫の面影が無ければならぬ。本書の價値も亦其邊にあらねばならぬ。この種の人物は、今日及び今後、著者の筆について廻るやうだ。斯くて満身の慚汗に塗れつゝ、寫し來つて辨天堂一炬の處に至ると、著者は此の作の捨つべからざる所以を自ら信ずることが出來た。

願れば此の作をはじめて本郷座で上演した時、高田實が此の良道僧に扮して、和歌浦の場に至り、情人に毒殺して失神した芳野を錫杖でおさへて『女！』と云つた時の光景があり〜と残る。その時、著者の隣席にゐた看客

が我を忘れて、うーんと腸の底から呻り出したのが耳に残つてゐる。僕は今でも高田實が不世出の名優であつたことを信じてゐる。高田は地下に起すこととは出來ないが、この劣作は再び世に出して、著者の愚を展開する事になつた。恐惶謹言。

大正十一年三月

著者



高野の義人

中里介山著



大和の國から紀州境への山間に黒駒といふ小村があつて、村の中程に落袖神社といふ古い小さな社があります。

この社は、女の白い脛を見て通力を失ひ吉野川の中へ落ちたといふ糸の仙人を祭つた社であるといふことです。

その落袖神社のうしろの方の一軒家に、お婆さんが一人、頻りに綿を紡ぎな

がら、どうも今日はお歸りが遅いと云つて呟いてゐます。

「婆や、兄上はまだお歸りなされぬかい」

奥の方でも、やはり人を待ち兼ねたやうな聲がする。これは十歳にはなるまいと思はれるほどの男の子の聲であります。

「あゝ、今日は少し遅いやうですが、その代り、どつさりと獲物がある事でせうよ」

婆さんは入りかゝる日脚を目ぶしさうにながめる。

斯うして表と奥とで話をしてゐると、やがて其處へ飄然と歸つて來たのは二十五六になる獵師いでたちの壯者であります。腰には獲物の雉子や山鳩がある。肩には一挺の種ヶ島がある。後ろには逞ましい豪犬がついてゐる。

「婆さん、今戻つた、今日は、この一羽の雉子奴の爲にエラく暇をつぶしたの

で歸りがおそくなりましたわい。どうもお留守御苦勞でした、もう宜しいから歸つて下さい」

「さうでしたか、貞助さんが、さきからお待ち兼ねですよ、それでは、わしは此れで御免を蒙つて歸ります」

留守居に頼んで置いた婆さんは、紡ぎ車を押しかけたげて歸つてしまつたあとで、壯者は草鞋を取り、足を洗ひ、圍爐裏の火を附木にうつし、その光をかざして屏風越に向ふを見やり、

「貞助まだ起きてゐるか」

「兄上、お歸りなさい」

「どうだ、鹽梅は」

「身體は何ともないが、何だか、眼がだん／＼見えなくなるやうです」

「ナニ、眼が見えなくなる……」

と云つて、附木を持つてゐる兄の手がブルツと顛えました。

兄は郡山の浪人で横川早苗病んでゐるのは其の弟の貞助です。父母亡き後、良からの親戚に陥れられて斯うして兄弟山住居、兄は晝の山に行つて働き、弟は留守をあづかる。その弟が病氣にかゝつてから、近所の婆さんを頼んで晝のうちだけ留守にゐてもらふといふ有様です。

この二人、水入らずの夕飯が済んで後、兄は今日の稼業の始末と、明日の仕事の用意とをしましてしまつた後に、弟の枕もとの行燈を掻き立て、

「どれ〜、昨夜のつゞき、平家倶梨迦羅峠の合戦を讀んで聞かせて上げやう」と平家物語の第七巻をひろげて、

さる程に、源平兩方陣を合す、陣のあはひ僅三町ばかりに寄せ合せたり。源

氏も進まず平家も進まず、やゝありて、源氏の方より精兵を勝りて、十五騎楯の面に進ませ、十五騎が上矢の鏑を、只一度に平氏の陣へぞ射入れたる。平家も十五騎を出して、十五の鏑を射返さす。源氏三十騎を出して、三十の鏑を射さすれば、平家も三十騎を出して、三十の鏑を射返さす。源氏五十騎を出せば、平家も亦五十騎を出し、百騎を出せば百騎出す……

こゝまで讀みさした時分に落柿神社の方に當つて、ジャーンと聞ゆる半鐘の音。早苗はそれに耳を傾けて、平家を讀むのも中止しました。

弟も亦、早くも半鐘の音を聞きとめて耳を澄まして、二人共、暫らく沈黙の形でゐましたが、

『火事だらう』

兄は、やがて身づくろひして立ち上がりました。

表の戸を少しばかり明けて、外を見廻したが葉月十三日の月が雲間にかゝり、空には風模様も雨の氣色もなく、まして物静かな山村の夜を破るべき火事の非常沙汰も見えやうとはしない。併し乍ら、半鐘の響きだけは、この物静かな山村の夜の空氣に揺られくゝて、或は高く或は低く、かうくゝとして耳もとに響き來るのであります。

「貞助や、別段に火の光も見えないから火事ではないやうだが、押込強盗でも此の村へ入つたかな」

斯う云つて兄の早苗は中と外とに氣を配つたが、やゝあつて、
「兎も角、ちよつと、落杣まで容子を見に行つて來るから、騒がずと寢て居れや」

早苗が鬨をまたぐ途端に、風を切つて其の前面に飛んで來て、伏し倒れたも

のがあります。

「誰だ！」

早苗が身構へをすると其の物影が、

「お願い、お願い、仔細はあとから申上げます、高野山より追手のかゝる者でございます」

と聞いて横川早苗は、勃然として此の者を隠まつてやる氣になりました。獵師となつてさへ窮鳥懷ろに入る時は、これを殺し兼ねるものであるのに、義を知る武夫の成れの果てであつて見れば、事の善悪、身に取つての利害、それは此の場合論外に置いて、先づ寄りかゝつた其のものを救はなければなりません。

「宜しい」

その者の手を取つて、我が家へ引き入れてビタリと戸を締めきつてしまひま

した。

二

間もなく外から此の家の戸が割れるばかりに叩かれる。

「横川様、横川様、大變が出来たから、ちよつくら此處を明けさつしやれ」

これは覺えのある番太の作十の聲で、それにつゞく數多の人数がゐることは慥かです。

「作十、夜中にあはたゞしい、何事じや」

中からは横川早苗が、さあらぬ返事です。

「何事どころの騒ぎではござんせんよ、あの半鐘が聞えさつしやらぬか」

「半鐘は聞えてゐる故、火事かと思つて出て見たが、火のうらも見えぬやうだ

から、引込んでしまつたわい、何しろ、病人を抱えての身だから、外の用心よ

り内の心配が大事ぢやほどに、皆々へも宜しくお斷りを頼みますぞ」

早苗が落ついてゐるのを外ではいよくもどかしがつて、

「いゝや、火事でござらねへ、火事ではござらねへ、高野様から大事の落人で

ござるわ、悪い奴が、たしかに此の村へ逃げ込んだと、お山のお役僧様がお出

ましになり、お庄屋様のお聲が、りで、斯うして一軒別に探して歩くのぢや、

お前様の處の番ぢや、さあ、皆様もお待ち兼ねだから、早く戸を開けさつしや

れや」

それを聞くと中で横川早苗が一層落着き拂つた聲で、

「それはく、火事か押込かと思ひましたら高野山からの落人、それで安心を

しましたわい」

と云つて、立つて戸を明けやうともしないから、外ではいよく焦れ立つて、
 『安心したで澄ましてゐられては困るだに、早く開けて呉らつしやれ、高野山
 のお役僧様達がお待ち兼ねでござるわい』

それを聞いた横川早苗が威丈高になつて大喝しました。

『コレ作十、痴呆けた事を申すな、峠一つ越ゆれば高野山の御領地かは知らね
 ど、此の黒駒村は歴然とした五條代官の支配下ぢや、代官からのお布令なら、
 椽の下までも明け開きませうが、高野山からと云はれては、一寸も其の戸を開
 ける事はなりませぬぞ』

この聲で番太は舌を吐いてしまひ、高野山出張の役僧に向つて、

『この通りでございます、ナニ、郡山の浪人あがりでございまして、つい、こ
 の頃、此處へ住居を致しましたんですが、理窟にかけると槓杆でも動くことぢ

やございませぬ、所詮、わし等には齒が立ちませぬから、旦那様方、一つお掛
 合ひなすつて見て下さいまし』

『宜しい』

役僧の一人が高野山と記した提灯を高く振りかざして、

『此のお家に物申す、我々は高野山より出張の者でござるが、寺法にそむきし
 大罪人を取り逃がし、これまで追蒐けて参つた、お手間は取らせ申さぬ、暫時
 の家探し頼み入る』

聲高らかに呼ばると横川早苗の聲で、

『人が變つての申入れも理には變る處がない、家探しの儀は、斯く申す主人が
 不同意でござるわ』

『ナニ、斯くまでの頼みを無下に断るとはいよく怪しい、高野山は天子將軍

も御會釋のある御寺格ぢやぞ、權威を怖れず後悔するな、踏み破つて探索するが泣き面かくなよ』

騎虎の勢で嚇してしまつたから、中なる人が嚇と怒りました。

「此は怪しからぬ一言、高野山が天子將軍より御會釋あるは清淨の佛地であるからちや、理不盡の壓制を加へて、人の住居を荒らすならば荒らして見よ、浪人したれど武士の住居、其の戸へ指でもさすが最後、年頃鍛えた此の種子ヶ島が物を言ふぞ』

横川早苗は立ち上がつて、秘藏の種子ヶ島を取り上げ、火繩の火をフツと吹いて銃口を調べました。

それを節穴からのぞいて見た作十が青くなり、

「あ、旦那方、こりや可くませぬ、此奴は糞度胸のある馬鹿でございますから、

それに砲と來たら怖ろしい上手な奴でございますから、うつかりすると飛んでもないことになります、ナニ、其の代り人間は極正直ですから、隠したなら隠した、隠さないものなら隠さないといふ言葉に嘘はございませぬ、まあ、こんな馬鹿は相手になさらず、向ふの谷間に幾軒もございますから、それへ御案内致しませう』

狂人に刃物の上を行つて、馬鹿に鐵砲は氣味が悪いから、高野山の役僧だといふのも内心はビク／＼もので、此の家を立ち去り、あちらの谷へと行つてしまひます。

三

此の一連が立去つてから、横川早苗は改めて、最前かくまつた怪しの人物と

對面しました。

微かな行燈の光で横川早苗が此の旅人の容子を見ると、武家ではないが、普通の百姓町人とも違ふ、態度にも言語にも、斯様な危急の間にあつて、しかも相當の品格と沈着とを失はない處は、しかく大罪を犯した悪徒とも思はれま
せん。

『私事は紀伊國伊都郡島野村の戸谷新右衛門と申す者でござりまする』
と聞いて横川早苗が何か合點することあり、

『は、あ、さては貴殿が島野村の新右衛門殿でござつたか』

伊都郡島野村の新右衛門といふのは、此のあたりに聞えた古い家柄で、代々の名主であり、それに代々傑物が出て、その近郷の出入は新右衛門が口を利けば納まるといふ位の勢力があり、また此の頃、高野領内の紛紜につれて、他領

とは云へ、横川早苗の耳までも其の名が響いて居りましたので、さてはと膝を進ませて、その物語を聞かうとします。

新右衛門は改めて、自分の身が、斯かる危急に迫つた顛末を語り出しました。

『御當所は五條代官の御支配地なれども、私村方は高野山金剛峯寺の領分にござりまする、御承知の如く高野山は嵯峨天皇の御代に弘法大師の御開基、日本無雙の名刹でございまして、天正の頃までは十二萬千石といふ御領を附け置かれました。其の後、織田信長公の紀州征伐の砌、熊野根來と共に高野山をも征服され、その際に十萬石を削られました處から、残り二萬千石となりました、然る處、徳川家の御政治となつて、別に修理料として三千石の御補給があつてそれが合せて只今の總寺領、村方より申しますれば、伊都、那賀兩郡のうち、紀の川南、大和の國境富貴村より西へ那賀郡小川庄梅本村まで、この長さ凡そ

十里、横幅三四里、村數にしては五十二ヶ村ございませぬ。

寺領の沿革を明細に物語り來りましたが、やがて慨然として言葉を次ぎ、

「諸國諸大名の御政治は、如何に壓制なりとても、其の中には多少は物のわか
つた人も居り、訴への道とてもござりますなれど、僧家の政治向として、言語
に斷へ果てたる壓制でござりまする……元より道徳堅固の聖僧ならば我身を割
いても人に施し給ふなれど、徳もなければ、政治向の術をわきまへぬ、貪慾一
點ばりの僧侶と來ては、始末のつけやうがござりませぬ、それと申すも、收納
の興山寺の學道と申す僧侶が時を得顔に非義非道に募りまする慘虐の體たらく
見ても聞いても居られませぬ」

戸谷新右衛門は、よくよく僧徒に對する怨みが深いと見えて、齒を噛み拳を
固めて、初對面の横川早苗に高野山の暴政を語らんとする。

律義一遍の横川早苗は肩を怒らして新右衛門の物語を聞いて居りますと、や
がて新右衛門は自分の被つて來た菅笠をハネのけると其の下から現れたのが古
びた一箇の櫛であります。新右衛門は其の櫛を取り上げて横川早苗の眼の前に
置きました。

櫛を前に置いた新右衛門が改めて横川早苗に向ひ、
「私一人が今夜の災難も、また高野領五十二ヶ村の歎きも詮じ詰むれば此の櫛
一つにかゝつて居りまする」

と云つて歎息し、眼前の櫛を取り上げて調べてながら、

「御承知の通り、當時天下の御規則は、お年貢上納の米はすべて京判と申する
櫛を用ゐて居りまする、高野山の事務所興山寺の納所にも天下の御法通り、
京判櫛を用ゐねばなりません。處が京判を用ひませぬ、却つて此の通りの

讃岐判といふのを用ひまして、これで領内の年貢米を取り立てまするので……
これが其の讃岐判の樹でござりまする、御覽下されませ」

早苗は樹を受取つて能くあらため、

「成程」

そこで、新右衛門は附け加へて説明する、

「讃岐判は京樹に比べますると一升に就て二勺づゝ餘計に米が入ります、つまり高野領二萬四千石のうちでは一年四百八十石づゝ非道に絞り上げられます」
新右衛門は再び早苗の手から樹を受取つて燈火の下へ突きつけるやうにしな
がら、

「のみならず、此の讃岐樹の口縁をよく御覽なされ、粘り氣がござりませう、
これが其の松膠でござりまする、此の通り夥しい松膠を樹の周圍に塗りつけて

其の上を糠にて隠し、一升につき幾千粒の米をなほ餘計に盛り上げまする、こ
の一事が萬事で、領内の人民を苛むのでござりまする、お察し下さいませ」
「憎い奴！」

横川早苗は我事の如く怒れる眼で、篤と讃岐樹の松膠を睨めて居ると、新右
衛門は言葉をつぎ、

「不肖ながら村々の束ねを致して居りまする私共、餘りの亂暴に見ても聞いて
も居られませぬ、或時は歎願を致して見ました、また或時は強訴に類する手段
も取つて見ましたが、一向にお取り上げがござりませぬ、剩さへ私共總代の者
は寺門の外へ突き出されてしまひました」

「言語道斷な坊主共！」

「それで此の上の手段は江戸表の寺社奉行へ訴へて出る、それでお取上げなき

時は將軍家へ直訴を致してなりとも此の曲直を正さねばならぬと、潜越ながら私共が其の趣意を認めました檄文に連判状を添へ二萬千石の村々へ密かに差廻しましたが、もとより異存の有らう筈もなく、領内の者の十の八九は瞬く間に連判に加盟することになりました。そこで連判の總人數のうちから十六名の總代を選擧して、相談とのひ、いざ江戸表へ向けて出立といふ矢先に事が破れました……と申しますのは、兼ねて斯かる事も有らうかと高野山の役僧共は、村々に隱密を入れて居りましたが、その隱密の爲に見破られて、寺方は捕吏を八方に出し、領分界は嚴重に守り固め、一方に支配下の重なる者を呼びつけて、或は脅し、或は賤し、この度、新右衛門が連判に加はつた者共は重き處刑に行はるべきなれど、特別寛大の思召を以て、前非後悔の上以來決して斯様な企てに加盟せぬとの證文を出さば許し遣はすべしと斯様に申し觸れましたところが

21

根が百姓の意氣地のなさとお申しませうか、皆おめくくと前非後悔の訖書を差出してしまひました、重立つた者が此の始末であるから長い者には捲かれろと小前の者共は一も二もなく其れに傾いて、二萬千石のうち一萬石は此れに靡かされてしまひました、淺ましくも腑甲斐なき人心でござりまする』

新右衛門は斯く語つて幾度か嗟歎する。早苗は皆を決してゐる。

『腑甲斐なき村々は右の始末でありましたが世にも頼もしきは残り一萬石と、修理三千石の村々でござります、向副、賢堂、横座、島野、丁田、馬場、田宮、河根、東畑、西畑、これ等數十ヶ村の民は最初の志を變へず、皆、この新右衛門に力を添えて呉れることとござりまする……併し乍ら、罪はわたくし一人が脊負つて立ち、餘人に迷惑はかけまい爲に、女房は離別致し、親戚や知邊の者とも一切の縁を絶ちまして、それで私は今朝たゞ一人で、年貢の納め所、興

山寺へ忍び込み、悪政の證據の此の讚岐樹を奪ひ取りましたが、危くも追手を受けて、彼方此方に隠れて、漸く此處まで落ち伸びました處を、幸運にも義心深きあなた様のお助けを蒙りましたのは、神佛未だ高野寺領二萬四千石の民を捨て給はぬこと、存じまする』

新右衛門が永物語を聞いて一々合點行きました横川早苗は、

『然らば、これより其の讚岐樹を持つて、江戸へ出て訴へなされる御了簡と見えるな、随分おやりなさい、あとに何かの心残りもござるなら、微力ながら此の横川早苗に御申し聞け下さい』

『有難いお言葉でござりまする、そのお言葉に甘へまして一つのお願ひがござりまする、それは此の度大事を思ひ立ちました事故、妻は離別致して里へ歸し今年十九歳になる新九郎と申す倅が、賢堂村の私弟に當る孫太郎と申す者の

家に預けてありまする、定めてお山の悪僧達の惡みが此の倅へかゝること、存じまするが、萬一、父が仕損じましたならば、其の志を次ぐやうにと、實は遺言のつもりで、この一通を認め置きました、お序の節もござりまするならばこれを倅の手までお届け下し置かれるやうに願ひたいものでござりまする』

『それは、いと易き事、確と頼まれました』

四

この事と前後して、紀伊國伊都郡名倉村の名主で甚内といふ者が、この度、祖先の供養といふ名で、高野山の事務を司る興山寺の上人を招待することがありました。

興山寺の上人といふのは學道僧都の事で、これが所謂、高野の悪政の張本で

あります。戸谷新右衛門が叫んでゐる、高野の悪政なるものは一に此の學道が方寸より出でたりと申して宜いのです。

名倉の名主甚内が、祖先供養の名で、この僧都を招待したのは、紀の川の鮎の季節であつたから、盛んに鮎漁を催して一行を款待し、その底意は寺領の山林を安く拂下げて貰つて、筏に切り組んで和歌山へ流し大儲をしやうといふ運動の一つの手段であります。

この學道僧都なるものは、もとより相當の修業もあり、膽略もあり、決斷もあり、人を壓する威力もあれば人心を收攬するの駆引も解してゐる、善い方へ向へば天晴の名僧智識ともなり得るのであるが、惜しい哉、高野一山に時を得て、一代の檜舞臺に押出すことが出来なかつたせい、人物が僻けて、その上に向うべき精力が色と慾とに向ひ、人を教ゆるに足る智術が却つて人を虐げる

の道具となつてしまつたのは情けない事です。

されば高野一山に於ける此の坊主の勢力といふものは凄まじいものであります。貫主大和尚は柔和にして物を争はぬ性質であるに乗じて二萬四千石の生殺與奪が此の坊主一人の權内にあると云つても宜い位の勢力であります。名僧碩學も此の坊主の御機嫌に逆らうと思ひにつけぬ復讐がある。領内の人民を虎よりも怖れしめてゐる彼の讃岐樹の虐政も一に此の學道僧都の方寸から出たもので、それともう一つ惡むべきことは、此の坊主が領内の容姿よき女と見れば、其の人の妻たり娘たり苦勞人であり處女であるに關はらず、それを手に入れて毒牙にかけるといふ風聞があります。

これは怖るべき風聞であるが、一方から云へば、此の坊主には、どこかに一種の愛嬌ある魔力があつて、女の落ちて來るのが多いのだといふ説もある。一

度、辱かしめを蒙つた女が、泣いて其の恥辱を怨み憤るかと思へば、さうでなく、中には其れから打ち込んで来るものもあり、心ひそかに學道様にお伽になつたことを光榮とする者さへあるといふ事です、妻を辱かしめられたり、娘を傷物にされたりしながら、泣き寝入りになつて争へない夫や親達もあれば、また進んで人身御供に捧げて何かの利權に有りつかうとする者もある。まことに齒痒い話であるが、專制の時代に、法力と権力とを二つながら備へた無冠の小帝王です。女人禁制の高野山に斯様な妖僧が時を得てゐることは、世に有り得べからざるの事共であります。

さうして今晚、この妖僧を招いた甚内の家には、今年十七になる芳野と云つて評判の美しい娘があるのであります。この芳野は、前の戸谷新右衛門が一子の新九郎の許嫁になつて居りました。

名倉の名主甚内夫婦は、僧都の一行を迎へて槌で庭掃くばかりの追従です。お供の連中すべて二十餘名、いづれも大陽氣で酒食の饗應にあづかつて大機嫌であると、羽織袴に威儀をたゞした主人の甚内が、恐る／＼學道僧都の前に平伏して、

「斯かる破屋へ大和尚のお越しを蒙りて、私一代の譽れにござりまする、何に致しましても片田舎の事でござりまして、お口にかなうものもござりませぬのは深くお詫びを仕ります、就きましては甚だ未熟ながら、私の娘が手ずさみに致しまする琴の一手をお耳を汚したう存じまするが、お聞濟み下さらば有難い仕合せでござりまする」

とお伺ひを立てると、學道は悦んで、

『それは一段と珍重、皆のものにも聞かせてやりたいものぢや』

「それは何とも痛み入つた仰せ、左様ならば早速、娘をこれへ召び寄せまする」
 そこで、學道をはじめ、つれた來た役僧、寺侍の面々が席に居流れて、甚内の娘、芳野が奏でる琴の一手を陪聽にあづからうとて大喜びです。
 そこへ琴を女に持たせて、悠然と姿を現はしたのは、甚内の娘芳野であります。學道僧都をはじめ、芳野の姿が現れた時に、はつと打たれて見惚てゐたのも無理はありません。

この土地で生れたけれども、京の親戚で育てられました。天性、容姿のよいのに京の水で研がれて、京の衣裳飾りで仕立てられましたから、京にゐてさへさぞかし、人の目を惹いたらうと思はれるのに、この席へ現れると見るほどの人が目の醒めるほどに打たれたのは是非ありません。芳野は人中へ出て、晴れの手藝を見せる爲めに少し上氣しましたから、お化粧の上にポーツと赤くな

り、恥かしげに一禮した風情が何とも云はれませんが、

一座のものが、その艶やかさに打たれて、うつとりしてゐる處に、たゞ一人、

『あつ』

と云つて面の色を變へたものがありました。それは學道僧都の傍についてゐた良春といふ眉目清らかな若僧でありましたが、芳野の姿を見ると我を忘れてあつと驚いて、人の怪しみの的となりました。

琴を傍に一禮した芳野も亦、その聲に驚かされて、ちらりと振り向いた途端に、これも何に驚いたかサツと顔の色が變りました。これは丁度、満々と水が張りきつてゐた池の中に一塊の石が落ち込んだやうに此の場の空氣を揺り動かしました。良春はそれつきり押し黙つて下を向いてしまひ、娘はふるふ手先を隠して爪を改める、そこで波紋が靜かに廣がるだけ廣がつて岸に漂ひ着くと

遂にまた、もとの静寂に歸りました。

他の者は、何故に良春が驚いたのか、その由を知らう筈ありません、また知らうとも思はないうちに、早くも琴の音に心を奪はれてしまつたが、ひとり奥山寺の學道のみはデロリと光る眼をして、良春の舉動と、芳野の姿とを見比べて、何か思ひ當る處があつたやうです。

五

席には酒宴の興が湧き、臺所は目の廻るほどの忙がしさである時に紛れて、裏庭の池の岸から、小笹の茂つた築山の陰に忍んで來たのは、美しい娘の芳野であります。

『良春様』

そこへ來ると芳野は暗い築山の影に向つて小聲で人の名を呼びました。

『芳野様、これにお待ちして居りました』

『お、よく忍んで下さいました』

二人は其處で手を取り合いました。

『良春様、お懐かしうございます、お琴の席で、あなたのお姿を見て、ほんに夢かと思ひました、もう、飛び立つやうな心持で何を弾いてゐたのか、さつぱりわかりませんでした、お別れしてから、もう一年になりますね、よくあなたは御無事でゐらつしやいました』

芳野は胸がはづみきつて、火のやうな言葉です。

『芳野様、わたくしは片時たりとも、あなたの事を忘れは致しません、叡山を出ましてから此のお山へ参りまして、今では奥山寺の御前のお世話を蒙つて居

りまする、いつの間にか、あなたはまた一段とお美しくなりました、今では、もう、坂本の小坊主のことなどは忘れておめでございませうね』

『どうして、わたしが、お前の事を忘れてよいものか、お前こそ、いつも變らぬ綺麗な御出家で、定めて在家の女子たちを惱ましておめでございませう』
『いゝえ、そのやうなことがございますものか、もう、いつになつても、あなた一人を思ひつめてゐるのでございます』

『ほんとに其の通りなら、わたしも、どの位嬉しいか知れませぬ、それはさうと、良春様、あなたに只今、相談をしなければならぬことが起りました、それは、外ではございません、あなたのお師匠様といふ方は、ほんとに怖ろしい方でございます』

『どうして、わたくしのお師匠様が、そんなに怖ろしいのでございます』

『わたし、如何したら宜うございませう、あなたでなければ相談をするものがございます、良春様、どうか、わたしに良い智慧を貸して下さい』

『まあ、一體、どうした譯で、そんな事を仰有るのです、わたくしのお師匠様を、あなたは如何してそれほど怖がらねばならないのですか』

『良春さん、まあ聞いて下さい、有らうことか、お前のお師匠様が、このわたくしに……今宵のお伽を致せと斯う申すのでございます』

『え』

『それは、あの僧都様の思召しで、わたくしの父母も薄々承知をしてしまったやうでございます、わたくしの身は籠の鳥でございますわいな、わたしの操も今晚限りでございますわいな、良春様、どうしたら宜しうございます、智慧を貸して下さい』

「まあ、それは怖ろしい事を聞きました、私には其れが本當と思はれませぬ、それですから、智慧分別も出ないほどに驚いてゐるばかりです」

「この場合に、嘘などが云つて居られるものですか、あなたのお師匠様は随分怖ろしいお方でございます」

「驚きました」

良春は、驚きの餘りに口も利けないで青くなりました。

常々、師たる學道に就て、宜しからぬ噂を聞いてゐないではないが、傍にゐて、其の優れた豪い方の部分のみを多く知つてゐる純な良春の頭では多分、それは嫉む者や陥れんとする者の作り言が大部分を占めてゐるのだと好意にか解釋が出来ませんでした。然るに今、この娘から、切羽つまつた相談をかけられて見ると疑念と困惑と恐怖とで、頭が火のやうに熱するのみで、舌も引つ

れる思ひであります。

「良春さん、何とかして下さいまし」

と云はれても何の思案も返事も出来ない有様です。

戸谷新右衛門の一子新九郎の妻となるべき筈の許嫁の芳野が、いつの間にか此の縁もゆかりも無い一若僧と馴染んで、斯うまで相談を持ちかけるほどの中になつてゐたに就ては一場の戀物語が無ければならぬ。

芳野が京にゐた時分、良春は叡山修學院の小姓でありました。山吹の花の咲いた頃、芳野が生花の花をかざして師の家へ通う時、良春も亦花と水とを携へて山を下つて来たことがあります。お互に同じ花を携へてゐたのが縁で、面を見合せると、二人共に赤くなつて通り過ぎました。

それが抑々二人の戀の緒であつたのです。それから同じ道を往來するうちに

お互に立ち留つて見送る眼と眼が物を云ふやうになりました。若し、途で良春を見ない日の芳野の心は如何に淋しいものであつたでせう。

ある盆の事、芳野がゐた親戚の家で法會を催して叡山から僧を招んだ。その時、山から下りて來たのが六十有餘の老僧で思ひがけなくも、その伴について來たのは頭を下ろしたばかりの良春であらうとは。

芳野も良春も如何に胸を躍らしたことであらう、家内中寄つて故人の物語をし、氣のよい老僧がお勤めのお經を繰返してゐる隙を見て、二人の戀は出來てしまつた。爾來、若き戀に燃ゆる二人の情思は火の様です。

霧の立ち迷う朝、鐘の響く夕、娘は叡山の上を仰いで此の淋しい時を、あの寂寥なお山の中で良春は、どのやうに暮らしておゐでなされることかと娘は案じました。山の上にもた良春はまた芳野さんは、今ごろ、此の山を見上げて、私

の事を考へてゐて呉れるのではないかと思ひ惱んでゐました。

山を下る用事のあつた時、良春はことさらに芳野の家の裏の戸を叩いて、はかなき逢瀬を樂みとして居りましたが、或時は人目に遮られて、徒らに琴の音ばかりを聞いて悄然と返ることもありません。

一夜を忍んで、二人手を取り合つて、月にかざやく琵琶の海をながめながら、泣いたり笑つたり、夢のやうな戀に夜の更けるをいとうたこともあるのです。

こんな風にして二人の戀は一年つゞきました。芳野は故郷へ呼び戻されることになり、二人はこれが永久の別れのやうに泣いて別れました。

それが今宵は計らずも此處で相見ることになつた其の嬉しさと懐かしさの裏には、怖ろしい悪魔が二人の戀を呪うてゐる。

師の坊學道が、わが戀人の操を弄ばうとする、その難儀が今宵只今に迫つ

てゐると打ち明けられても、何の思案も出来ないのは情けないことです。

『良春様、仇し人に操を汚されて、わたしは生きてゐる空はありませぬ、あなたは、わたしが死んでも宜いと思ひますか、あなたは、わたしを殺すつもりでござんすか』

『どうして、わたしが其のやうな心でゐてよいものですか』

『そんならば、今宵に迫る、わたしの身をどうして下さいます』

『さあ、それは』

眼鼻を明けたいけれども、この柔和温順な若僧には何等の思案も決断も浮ばないのであります。

『良春様、今夜、わたしを連れて逃げて下さい』

『え』

いよくの時は却つて女の方が度胸がよくなるものか知らん。連れて逃げよといふ女は、良春の手を取つて、火のやうな自分の肌へ巻きつけてしまひました。

『あゝ』

と良春は苦しみうめくばかりです。

『嬉しい、あなたと一緒に逃げませう』

『わたしも、あなたと一緒に』

二人の熱い思ひが鉛のやうに溶け出して囁きの聲が洩れるのは駈落の相談でありませう、その時に

『良春、良春』

それは師の坊、學道僧都の呼ぶ聲であります。

『は、はい』

良春は振りほどいて駆け出しました。

『では、良春さん、間違ひなく、あの川の岸に待つてゐて下さい』

二人の姿は其處から無くなりしました。間もなく裏の椽側に近い處へ戻つて、胸の動搖を押ししづめてゐる良春の傍には、師の坊學道僧都が立つて居りました。

『良春、お前は今、何處で何をしてゐた』

『はい、あの、雲の往來や、山の姿があまり面白うございました故、門前にゐるんで、それに見惚れて居りました』

『これ、偽りを云うな』

斯う云はれて良春は急に辣んでしまひ、わななくとふるえて口も利けなくな

つたのを見て、學道は嚴かに、

『良春、そちは良くない道に落ちたな。女に迷はされてゐる』

『恐れ入りました』

良春は一も二もなく恐れ入つてしまふより外はありませんでした。

『迷うてゐる者の眼には、すべてが宜く見える、そちは當家の娘に迷はされてゐる故に、あの娘を信じきつてゐるらしいが、女といふものは油斷のならぬ者じや』

そこには威歴もあれば、師として弟子の迷亂を憐れむものゝやうにも聞える。また、わが戀人に何か不純なものゝ影がひそんでゐる其の警告のやうにも聞きなされるので、良春は、いつの間に、師の坊が、自分とあの女との仲を見破つたのだらうと、それを怪しむ餘裕もありません。

「はい、あの人は……私の、昔の……友達でございました」
 學道は、それを笑つて聞き流し、

「昔の友達なら友達で宜からうが、深くなつては爲にならぬぞよ、あれは、あの通り美しい面をしてゐるが、内心は計り難い女じゃ」

「え」

良春は、此の一言には多少、躍起となつて反抗して見なければ納まらない心です。

「恐れながら、御前様、それはお考へ違ひでございます」

「何故」

「でも、あのお嬢さんは、そのやうな、ふしだらな女ではございません」

「ふむ、そちには左様に見えることであらうが、あの娘の身持は、このあたり

一般の評判に聞いて見てもわかる、第一、あの女には許嫁があつて、その上に、噂を立てられた男も一人や二人ではないのじゃ」

「何と仰せられます、あの人に許嫁が」

「さうとも、疑ひがあるなら名を云うて聞かせやう、それは島野村の戸谷新右衛門の倅新九郎といふものが、以前から、あの女の許嫁で、二人が間は、モウ疾に出来てゐるのだ、それに就て、良春、そちが、今二人の中の戀の踏臺に使はれてゐることを氣がつくまい」

「え、私には其れがわかりませぬ」

正直な良春は頭を抱へて苦しがりました。あの人に許嫁があらうといふ事は、ついぞ聞かなかつた。師の坊がその名を指して教へて呉れる位だから、まさか嘘ではあるまい。それを今まで自分に隠してゐたのが水臭い。それを疑ひ

はじめると良春の頭はわく／＼として、それからそれと疑念と嫉妬とに追はれて行く外はありません。

成程、今はもう、あの濃艶な姿で、幾多の男を手玉に取るやうになつてゐるのか知らん。自分も、その翻弄の相手にされてゐるのかわらぬ。良春が熱湯を呑まされた思ひでも立つても居られないのを、凝と見てゐた學道が、

『良春、良春』

と物軟らかに言葉をかけてから、

『そちが爲には戀の仇、お山の爲には佛敵、それを、そちの手で退治して功を立てる氣はないか、島野の新右衛門父子は高野山の佛敵である、新右衛門は今行方が知れぬ、忤の新九郎を殺して佛敵を退治すれば、自然にそちの戀敵も討てる、或は、そちが戀も叶うやうになるであらう』

と云つて學道が良春の手を取つて引き上げるやうにするから、怪しんで探ると、意外にも其の手に與へられたのは一口の白鞘の短刀でありました。

『え、え』

良春は與へられた短刀を見ると、總身に水をかけられたやうにゾツとして、石像のやうに其處へ凝立してしまひました。

學道の姿は其のまゝ家の中へ消えてしまひます。

暫く凝立してゐた良春は、やがて、何を考へ出したか、その短刀を握つたまゝで、全く無意識に其の場を駆け出し、庭より垣の外へ、垣の外から畑道へ、一散に走せ出して、川の流れの前まで来てビタリと足をとどめたまゝ身動きもしません。

六

これと前後して、裏の杉山で待ち合せて逃げる約束をした娘の芳野は、いつまで待つても良春の姿が見えないのに、やきもきして、居たり立つたりしてゐました。

程なく、雑木の蔭でガサと音がしましたから、さてはと胸を跳らせると、其處に笠を被つた僧形の一人が来てゐて、小手招きする姿が、たしかに見えましたから、芳野は飛び立つ思ひで、

『良春様、あまり遅かつたではありませんか』

と云ひながら取り絶つたところを、その僧形の男は、無雑作に抱き上げてしまひました。

『まあ、お前は……』

芳野が呆れて聲を立てやうとする其の口を押へてしまつたのは、良春にしては手荒い、のみならず、その抱き締めた力と、抱き締められた骨節は良春ほどの軟らかなものではありません。

まさしく人が違います。芳野は叫びを立てやうとしました、けれども、すでに其の大力で早くも猿轡をかませられ、叫ぶことは元より動くことさへも出来ません。そのまゝ、ずん／＼と引抱えられて林を抜け、岩を下り、滔々として流れる紀の川の岸まで来ると、繋がれてあつた櫓の筏に軽々と飛び乗つた處で、芳野を筏の一端に抛り出して、筏を解くや、棹を取つて、ずん／＼と紀の川を漕いで下ります。

それとも知らぬ當の良春は、短刀を握り渦を捲く頭を押へて、川の岸に我を

忘れて立ち盡してゐたが、やゝあつて、約束の時と處を思ひ出しました。

『あゝ、裏の杉山、裏の杉山』

斯く思ひ出すと、矢も楯もたまたまず、蓦然に裏の杉山へ駆け込んで見ましたが、その時は、もう芳野の姿は見えませんが、彼は半狂亂の體で、杉山の前後をうろくしてゐる時に、甚内の屋敷の方から夥しい人が、此方へ駆けつけて来て、早くも、うろくしてゐる良春の姿を認めると、

『おゝ良春がゐたく、大切のお嬢さんをかどわかつて連れて逃げやうといふ大それた良春が、まだ此んな處にうろくしてゐた、それ取捉まへろ』

『あ、モシ、私は其のやうな悪いことをするものではござりませぬ、御前様にお聞き申せばわかります』

『黙れ、その御前様の仰せで貴様を縛るのだ』

良春は多勢の爲に有無をも云はさず引括られてしまひました。

兎も角、斯様な恥かしめに逢つても、お師匠様の前へ引出されさへすれば許して戴けるものと信じきつてゐた良春は、師の坊の前へは引き出されず、其のまま、物置の中へ抛り込まれてしまひました。

何だかわからない、師の坊の前へ出さへすれば自分の罪も許して戴ける、良春はたゞさう思ふ心一ぱいで、どうかして、この縄目を解いて、この窮命から免れたいものと一生懸命になりました。力限りに身を動かして見ると、結めの縄が思つたより弛い。いろくにして見ると其の縄の一端が抜けました。柱の釘へ持つて行つて引かけると、幾筋の縄が除れて辛くも自由の身となつたから、やれ嬉しやと物置の戸へ手をかけました。錠が下ろしてあると思つた處、これも難なくがらりと明いたから、良春は表の暗へ走せ出す途端にカラリと懐から

落ちたものがあります。あはて、拾ひ上げて見ると、それは、最前、師の坊から與へられた一口の短刀でありました。良春は愕として其れを懐へ押込み、脱兎の如く外へ飛び出してしまひました。

七

黒駒に住んでゐた郡山の浪士横川早苗は計らずも戸谷新右衛門が危急を助けて、其の義心に感じ入り、頼まれた手紙を持つて、賢堂村の孫太郎方に新九郎を訪れて、その手紙を渡した上に、新九郎から、また改めて高野山の暴政の顛末を聞き、共に涙を流して痛憤し、この後、及ばすながら、何處までも力になつて高野の悪僧共を挫いてやらうといふ相談の下に、夜の明けるを知らずにゐる處へ、名倉の甚内から飛脚が來ました。聞いて見ると、夜前の騒ぎで、甚内

の娘の芳野が行方不明になつたといふことです。驚いて新九郎は早苗にも事情を話し、直様立つて、甚内の家へ駆けつけました。早苗は家に残した病人が心が、りであるといふ處から、黒駒に歸るべく新九郎と一緒に賢堂村を立ち出でました。

途中で早苗と袂を別つた新九郎が甚内の家へ着いて見ると、その一足先きに興山寺の一行は山へ歸つた處です。

『旦那様、旦那様、紀の川の精進崖の處に此の櫛が落ちてゐました、これは確かにお嬢様の差櫛に違ひがござりませぬ、お嬢様はあそこから身投げをなすつたせ』

作男の利助が斯う云つて櫛を持ち込んで嘯いでゐる處へ新九郎も來合せたから、家内の者達と一緒に、芳野の櫛の落ちてゐたといふ精進崖の處まで行つて

見ました。

人が顛倒して噪いでゐる間に新九郎は四邊の草木や砂の上の足痕などを念入りに見廻し、崖の傍に筏をつないであつたらしい藤蔓の切られてあることなどを見定めると、芳野は身投げをしたものではない、誘拐されたものか、さもないければ合意の駆落をしたものであるとの考へが頭の中へ、さつと閃きました。その途端に、ふと、眼に留まつたのは誰も今まで氣のつかなかつた一連の珠數が、岩の蔭にはさまれて落ちてゐることでありました。

僧侶の持つ珠數と、女の差す櫛、新九郎の頭に電火の如く閃めく者があつて、思はず眼を擧げて屹と高野山の方を睨みつけました。

別に思ふ所のあるらしい新九郎は、無言で珠數を懐中したまゝ、衆と離れて筏の通つて行つた川の岸をすつと下つて行くと、やゝあつて、息をはづませな

がら、其のあとを見え隠れについて行くものがあります。それは若僧の良春です。良春の片手は絶えず懐に入つて、その手先には例の短刀をしかと握り締めてゐるのです。面も青ざめ眼も血走つて、巖角を踏む足もとには血さへ滲んでゐる。

一心に川の流れと岸をのみ檢分して歩く新九郎の背後から、危うく覗ひ寄つて、一心なればこそ、この儼弱い若僧が、やつと短刀を抜き放つて、

『命を貰つた！』

新九郎の側腹をのぞんで無二無三に突き立てたものです。

これには驚かされた新九郎が、はつと身をかはしました。氣の毒にも折角の良春の一心凝つた短刀の刃先きも、新九郎の帯の處を斜にかすつたどけで、前へ流れてしまひました。その流れた腕を、しつかりと押えた新九郎は力もあ

れば劍術も出来る人です。良春は到底その敵ではありません。

『これは危ない、さあ何の怨みで此の新九郎を殺さうとなさる、新九郎は人に怨みを受けるやうな覺えが更がない』

斯う云つて短刀を抜き取つてしまひました。こゝで良春が、すべてを打ち明けて懺悔をしてしまへば宜かつたらうに、それをするほどの勇氣も分別もあるのではありません。辛うじて

『人違ひ、全く、人違ひで失禮を致しました、誠に申譯がござりませぬ』

流石に、これだけの言ひのがれを考へ得たのに過ぎません。さうして、彼は兩手を突いて砂の中に頭を没して泣き伏したが、その涙は口惜し涙です。

『人違ひとあらば如何も仕方がないが』

人の生命を視はうとするほどのものにしては餘りの意氣地なさだから、新九

郎も憎いよりは哀れになりました。哀れになつて見ると此の僧形の若僧と、先程拾つた珠數の事と思ひ合せて見るとまだく何か其處に有りさうである。けれども、淡泊にして邪推を好まない新九郎は、物穩かに此の意氣地のない大膽者を許してやりました。

『人違ひにもせよ、斯様な事をなさるのは宜しくありません、私なればこそ宜けれ、他の人だと大事になります、さあ、私も黙つて別れますから、あなたも黙つてお歸りなさい』

手を取つて着物の塵を拂つてやります。

八

さても、黒駒村の横川の浪宅を立ち出でた戸谷新右衛門は、頭に戴く一蓋の

笠の背には讃岐樹、道中差を一本差して大和路から伊勢路をかけて東に下らうとする。時は享保の四年、秋八月十三日の夜半。

五條の町の神宮寺前まで来て、ホツと息を吐いて、先づ、これよりは高野の手も及ぶまいと、神宮寺の門前に沿ふて町の端れへ出やうとすると、その足許に躓いたものがあります。

「痛えな、氣を附けやがれ」

見れば菰を被つて寝て居た乞食であります。

乞食であつたので胸を撫で下ろし、

「大きに濟まなかつた」

幾らかの烏目を投げ興へて立ち去らうとすると乞食はムク／＼と菰から首を出して、

「旦那、お待ちなさい、エ、旦那」

面倒だから取り合はずに行き過ぎやうとするのを起き直つた乞食が、

「モシ、間違つたら御免下さいまし、お前様は島野のお名主様ではございませんか」

「ナニ」

この一言に新右衛門はギツクリとして立留ると、

「ハ、ハ、違えござんすめえな」

新右衛門は身構へをして、

「お前は何だ」

「へえ、わつしは乞食でございます、御覽の通り」

人を食つた言分が氣味が悪いから新右衛門は、

『わしは、島野村の名主とやらではない』

云ひ捨て、足早に歩き出すと、乞食はあはて、

『これさ、島野村の旦那、冗戯じやございませぬ、こゝを素通りすると、あなたのお命が危なうございませぬ』

『お前は何を云つてるのだ』

『まあ、何でも宜うございませぬから、わしと一緒に本宅の方へお出でなさいまし、こゝは出店ですからね、どうも、お前様の足許が危なくつて堪らねへんでございませぬから』

この時に、向ふの藪蔭から提灯の光が、チラ／＼と見え出しました。乞食は其の提灯の光を見やつて、

『ハ、、、 やつて来た、やつて来た、ありやあ高野山から来たんです』

せ、さあ、早く、わしの本宅へお出で下さいまし、本宅は此の裏の山の穴の中にあるんでございませぬ』

合點の行かない乞食の云ひ分であるが、さりとして此方に向けて飛んで来るあの提灯の光は更に危険です。

『世の中は何の糸瓜と思へどもブラリとしては暮されもせずかネ』

乞食は酒啞々々として此んな鼻唄をうたひながら、新右衛門を案内して寺の裏山の松の大木の下の穴ぐらのやうな所の前まで引張つて来て、

『さあ、旦那、これが、わしの本宅でございませぬから遠慮なく奥へ通つてお呉んなさいまし、ハ、、、』

新右衛門は度胸を据ゑて、その穴ぐらの中へ入つて敷き込んだ荒蕪の上に立つてゐると、乞食はお燈明皿に盛られた燈心を掻き立て、

「島野村の名主様、お前様が、そのお姿で其の柵を持つて、この街道を下らうとなさるのは恐れ入つた度胸でございますね」

奇怪千萬な乞食は、わが名を知つてゐるのみならず、脊に負つた柵のことまで知つてゐる。まかり間違へば斬つて捨てやうと脇差の鯉口を切つてゐると、

「ハ、、、御心配なさいますな、わつしは高野山の廻し者でもなければ、お前様の足許を見込んで、幾らかお貰ひ申さうといふ性質の悪いんでもございません、つまりる處の只の乞食でございます」

相變らず酒啞々々としたものだが高野衛門は更に油断がありません。その時に乞食は、懷中から一枚の紙片を取り出して、

「まわ、旦那様、これを一つ読んで見てごらんなさいまし」

「何だ、それは」

新右衛門は、この紙片を受取つて、微かな燈明の光に照らして見ると、これは高野山から廻つてゐる自分の人相書であります。それを讀み了つて新右衛門は、さても早いことかな、もう、自分の人相書がこれほど委しく記されて、この乞食の手にまで落ちてゐるのかなと思ひました。で、いよ／＼、この人相書を持つて自分の腹の底まで見抜いて、わざと、翻弄を試みてゐるらしい、この奇怪な乞食に一寸の隙もありません。

「如何です、旦那、その紙つきれが、ずうつと此の街道一般へ散つてゐますせ、高札も立つてゐますせ、そこんところを、お前様が其のなりで突切らうと云うんだから、恐れ入つた度胸だ、大方、島野村の名主様には要らねへ命が一百もあるんでござんすべエ、ハ、、、」

蝦蟇のやうな笑ひ方をしました。いよ／＼讀めないのは此の乞食の腹です。

「お前は、この人相書を一通り読んで見たのか」

「へえ、読みました」

「こゝに島野村の新右衛門を捕へたものには百兩やる、居所を訴へ出たものには五十兩やると書いてあるが、それも讀んだのか」

「へえ、よく読みました」

「それで、お前は、その島野村の新右衛門とやらを眼の前に置きながら、なせ捕まへる氣にならない」

「さあ、其處だ」

「乞食は膝を組み直しました。」

「世の中は廻り合せでございませうよ、情は人の爲ならずといふ事がございませうがねえ、忘れもしねえ四年前の霜月十六日の事さあ、雪の中で、わつしが打

倒れてしまつたんでございませう、何しろ、まだその時分、この商賣は新參でね、貫ひはなし、腹は減る、足は疲れる、骨身は凍える、眼が眩んで、よろ／＼と倒れた處は、大きな構への古い門の下であつたことだけは覚えてゐましたつけ……それからあとは夢のやうで、暫らく經つて呼びさまされた時に、暖けえ蒲團の上に寝かされてゐましたつけ、やがて次の間から一人の情深い旦那様が現れて、氣分はどうだ此れを食へと云つて、熱いお粥を持って來て呉れました、その熱いお粥が五臓六腑まで染みませ、いざ出かけやうとする時に、其の旦那が綿の入つた胴着と二分の金を下すつた、島野村の新右衛門様、もう一度、そのお燈明で、この野郎の面を改めてお呉んなさいまし」

「はゝあ……」

この時、新右衛門は多少の思ひ當ることがありました。その時の些細な恩義

を、この乞食が今に覺えて忘れないのかなと、一種異様の感に打たれてゐると、『それで旦那様、そのお姿で、この街道を下らうとなさるのが、あんまり度胸が善すぎますから、わつしが此處で一つ、乞食非人の秘傳を教へて上げやうと云ふんでございます、悪いことは云はねえから乞食非人に化けてお出でなせえまし、これでも旦那様、仲間には仲間だけに、相當の禮儀格式と云つたやうなものから手形符牒と云つたやうなものもあるんでございますからね、どれ、一つ、乞食指南の皆傳を許して差上げませう』

此の奇異なる乞食は自分の衣裳を脱いで、新右衛門を、すつかり本物の乞食非人にこしらへ上げてしまひました。

九

こゝで異様なる乞食に別れ、新右衛門は、その後、大和路を伊勢へ出て、東海道をどうやら無事に下つて、三島の宿まで来るには來たが、こゝに難關の箱根山があります。

このお關所を越えるに就て、何の思慮も分別もなく上り三里の石高道を歩いて來たが、高い處から、蘆の湖畔、塔ヶ島、權現の森を此方へ、お關所の構へを見ると氣おくれがして進むことが出来ません。

と云ふのは、こゝで取押へられて、讚岐樹を發見されでもしやうものなら今までの苦心が水の泡となるからです。どうして無事に此のお關所を越へやうかと苦心慘澹を極めたが、さりとて何の名案も浮ぶではありません。儘よ、運を天に任せて突きつて見ろ、と、力なく足を踏み締めて立ち上らうとした時に、うしろから新右衛門の肩をハタと叩いたものがある。

「兄弟、お前も、小田原の緑町の施行へ行くんだらう、一緒に行くべえ」

斯う云ひかけたのはお仲間の乞食であります。それを聞いて、渡りに船と思つた新右衛門は抜からぬつもりで、

「さうだよ、けれどもなあ、俺は惜しいことに手形を失くしちゃつたから、お關所が越せねえ、それを今心配してゐる處なんだ」

新右衛門が斯う云つたのを、後ろから肩を叩いた乞食が聞いてチロ／＼と其の面をながめながら、さも蔑すむやうに、

「何を云つてやがるんだ、手前、まだ新參だな、何處の國に一々手形を振り廻して名乗つて歩く乞食がある、青天井の下が皆んな此方黨等の屋敷内だ、何處のお關所だつて、大手を振つちやあ歩けねへが、小さくなつて通る分には、お目こぼしのあることを手前はまだ知らねへのか」

この一言が、また新右衛門に取つては、神佛のお告と思はれるほどに有難く聞えました。そこで漸くお關所へ來かゝつたのであるが、身體はよしお目こぼしがあつても、この櫛が難物である、身體は調べられても言い抜けの道があるが、櫛を發見されたら萬事休するより外は無いと思ひましたから、窮策の結果、被つてゐた笠を脱いで、これを伏せて、笠の下に櫛を隠し、頓首膝行して、息を殺してお關所の前、半町に足らぬ處が千里二千里もある思ひで歩きました。幸にして、同行の乞食共の面が、關所役人の間に賣れてゐたものか、海道往來の乞食非人の御定連と認められたものか、首尾よくお目こぼしとなつて、箱根の關所を無事に通り抜けることが出来ました。此處を抜ければ、もう江戸へ着いたも同様であります。

高野山の夜は静寂の極まれるもので、人間界にまた有るまじき崇嚴の靈境であります。

九百餘坊の寺々に燈明あり、磬の音、鐘の響、讀經の聲さへやんで、一山宛ら眠るが如く、耳を澄ませば、何處ともなく、佛法僧の鳴く音を聞く。

興山寺の後ろの學寮の一室に、二十三と覺しき僧侶が一人、經机に向つて、一心不亂に何をか書いてゐます。頭は蓬々として剃刀を當てざること幾月、一室の中は亂離たる荒原の状態で、佛典經卷が山の如く積まれ、黄卷赤軸が秋の木の葉の散れるが如くに亂れてゐる。

壁には弘法大師の御遺誠と覺しきが、正しく認めて掲げられてある。書きさ

した筆を机の上に投げ出して、徐ろに頬杖をついて、ながめるともなく外をながめる。

天を突く巨杉の樹立を通して引かれた笈の水が流れてゐる。十六夜ばかりの月が杉の間から洩れて光をこゝまで投げてゐる。月の光と、燈火の明りとで、この僧を見ると、面は痩せ贅れて眼のみが異様に光る、一見して物凄さばかりの風采であります。

此の僧、名は良道、武藏野の片田舎に生れた農民の子でありましたけれど、幼にして聰明穎悟、よく書を讀み、道を知るの人でありましたが、一旦、厭世の心を起して、此の高野山に入り、可惜、青春の身を佛に捧げるに至つたのであります。

それで、此の興山寺へ入つて以來、食う事と寝ることの外には手に經卷を離

さす、誰人とも口を利かず、ひとり此の一室へ閉ち籠つては有ゆる典籍に眼を曝らしてゐるのです。

奸悪なる師匠の學道僧都ですらが、此の良道だけは別扱ひの變人として退け物にし、其の爲すが儘にまかせて何とも干渉をしません。同學の僧達も、やはり同様の變人扱ひにして言葉をも交はすことはしません。さりとして、別に悪いことをするのではないから、敢て憎まれるといふこともないのです。

此の良道法師、先頃より、何思ふ所ありけむ。一千卷の經を書寫し、これを諸國の寺々に納めやうとの願望を起し、日課を定めて、そのお經を書いてゐるのです。今も、その筆を置いて月をながめてゐたが、夜は全く更けて、高野満山は大靜大寂の極まれるものであります。

この靜寂を極めた境内の、良道がゐる處の部屋から、左に當つて、常には誰

もゐない物置同様になつてゐる寮の中で、怪しげな物の音がするのは不思議です。この通り靜かな夜中ですから天井の塵の落つる音までが耳に入る中に、其の物置に起る物音が、どうやら、人の苦しみ唸くやうにも聞えるのは、怪しい事の限りと一旦は耳を傾けたが、そこは無頓着の學僧の事だから、再び筆を取り直して經卷に向はうとすると、又しても、一層苦しみ唸くやうな人の聲、而もそれが明かに女の聲と聞えるのだから其のまゝには置けません。

大師以來千餘年、女人禁制の高野山に女の忍び泣く音の聞えるといふのだから、さすが精進潔白の良道法師が、これを聞き捨てに出来ないのは無理がありません。

二たび怖ろしき唸きの聲が起つた時に、彼は、よろ／＼と座を立ち上りました。枯木の如く瘦せた身體を其のまゝ椽の上に運んだのだから別に足音を忍ば

せる必要もなく、やがて、幾間を隔てた學寮のうちの、その聲のしたあたりを尋ねて行くと、その一室に點火がついてボンヤリと障子が明るくなつてゐるのであります。女の唸くやうな聲は正しく此の障子のうちから起つてゐるのであります。良道は其處で立ち止まつて、そして障子の破れから、ズツと中をのぞいて見ました。

『罪障消滅!』

良道法師は、あはたゞしく、わが眼をつぶつて——そのまゝ——元の廊下を引返して、風の如く我が一室に飛び込みました。そして經机の前に身を落して、肩の聳えるほどに太息を吐きました。

たゞ今、見て来た一室の中には實に女がゐりました。しかも其れが二八と覺しい濃艶な美女が縛られて柱につながれて悶え苦しんでゐる。その傍らには、兼

ねて見知りの寺の惡僧栗學が、横に寝ころんで大餅で眠つてゐました。

怖ろしかつたのは其れではありません。女は亂れてゐました。黒い艶々しい髪の毛も亂れてゐました。肩から乳のあたりまで眞白な肌が現れてゐました。燃え立つやうな緋縮緬の下着がハラ／＼と亂れてゐる下から、餅のやうに和らかな肉があらはになつてゐました。

机の前に瞑目端座して、只今、見たまぼろしを掻き消さうとして、それを掻き消すことが出来ません。如來の御尊像や、經典の文字が烟のやうに飛んで行つて、残るところのものは、女の髪の毛です、その和らかな肌です、燃え立つやうな緋縮緬です。強烈なる酒を一度に飲ませられたやうに、心身眩暈し、縮緬を離れた桶の中の水のやうに、引き締めやうとすればするほど、八方へ奔流するばかりです。

眼をつぶつて唯心の威力で、それを壓服しやうとしたが其の甲斐がありません。眼を見開いて、この悪魔を睨み返さうとした時、燈火明滅の前壁に、歴々と讀まるゝ、本山開基、弘法大師空海上人の御遺誡書。

女人は地獄の使なり。能く佛の種子を斷つ、外面菩薩に似て内心羅刹の如し。然らば即ち我門徒に於ては、眼に女人を見ず、況や和言昵望に於てをや、何ぞ況や、女身を犯すをや、若し惡縁に逢ひ、女根を犯す者あらば、秘密真言の章疏、鈴杵輪羯磨等の具に於て其形を見る可からず、又手に取るべからず、若し此の禁制に違ふ輩は、我れ十六善神、内外諸惡神をして、彼の精氣を奪ひ、短命七難を施し、後必ず無間地獄に墮ちて出づる期無からしめん。嚴肅峻烈を極めた、これが所謂女人禁制の本文であります。良道法師、これが眼に入ると、五體ワナ／＼と顫えたが、やをら立ち上がった

て、書きかけた千部の經文、近く満願にならうとするものを、片端から取り上げてピリ／＼と裂きはじめました。

この一室がもとの靜寂に返つて、紙を走る筆も止んでしまひ、夜は深々と更けて、世界がそのまゝ、死の底へ沈んで行きさうな時に、彼の別寮のほとりで遽かにけたゝましい叫びが起りました。

第一には惡僧栗學が絶え入るやうな叫びであります。

『良春、貴様、おれを殺したな！』

同時に障子がバタリと倒れ、ツームと唸る聲、撞と倒れる音。

やがて廊下を走る音があつて、その足音が、良道の室でハタと止まると、『良道様、兄僧様、これにお出でござりまするか、どうぞ、お助け下さい、良

春は人を殺して参りました』

障子を押し開いて、そこへ伏し倒れたのは紛う方もなき、良道に取つては弟子に當る若僧良春でありました。然もその良春の後ろには最前の彼の亂れた女がゐる。

「兄僧様、わたくしは人を殺して参りました、この女故に、栗學を殺して参りました、この罪が怖ろしうござります、罪亡ぼしに兄僧様の手で、どうぞ私を殺して下さいまし」

良春の前に投げ出したのが、血に染みた一口の短刀であります。

「退れ！ 悪魔！」

良道はすぐつと立つて室の中から椽の下へ、良春を蹴落して扉をハタと締めてしまひました。

夜のまだ明けない時分に、女人堂の前から不動坂を走つて、龍王溪の祠まで落ちて來た良春に芳野は其の祠の前で落ち重なつて、二人共、聲を合せて泣きました。

「芳野様、悪縁でございました」

良春は斯う云つて絶望の聲であるのに、芳野は

「いゝえ、悪縁ではありませんせぬ、良春様、かうなつた上は、もう二人の世界でござります」

「何をいひます、あなたは、あんまりお心が強い」

「良春様、お前はまた氣が弱過ぎる」

「えゝ、その通り、私は弱過ぎます、ひとりでは死ぬことさへ出來ません、芳

野さん、二人で、あの水の底へ身を投げて死にませう』と、
 『厭々、わたしは死ぬことは厭、これからお前さんを連れて京都へ行つて、二人で楽しい暮らしを致します』

芳野は可愛ゆい子供を抱くやうに良春を抱き締めて泣きました。

十一

戸谷新九郎は芳野と許嫁ではあつたけれど、本人がそれを望んでゐたといふわけではなく中に立つ人が、それと定めてしまつたものです。

ですから、芳野に對しては、さまでの愛着を持つては居りません。もとより良春との間を知らう筈もなく、知つた時には、綺麗に其の約束を解いて、何等の心に恨みを残さない性質の人間ですが其の事は何も知らず、たゞ自分を殺

さうとした良春の舉動が解せないので、先とは反對に新九郎が良春のあとを見え隠れにつけて、高野山の境内へ別け入りしました。

夜になつて良春の忍び行く處は興山寺の後で、垣を越えて入つて學寮の間毎間毎をうかゞつてゐるから新九郎も其のあとを、ついて行くと、突然、その一室の障子が押し開かれて、さきに良道が聞いたと同じことの、

『良春、貴様、おれを殺したな！』

といふ凄まじい絶叫です。

その聲と共に廊下を逃げて走るのは、たつた今の良春と、その手に引つれて其の室から出たのが、目のさめるやうな若い女……はて、芳野ではないか、新九郎は追ひかけて行かうとした途端、石につまづいて轉び、小溝の中へ落ちて、しばし起き上がることが出来ません。起き上がった時は、寺々の大騒ぎで、新

九郎の周囲は、寺の人を以て遠巻きに巻かれてゐるといふ有様です。

おぞましくも新九郎は、逃れんとして逃るゝ道なく、大衆の手に捕へらるゝの運命となつてしまひました。

引出されて調べられて見ると、これは、山の仇敵、戸谷新右衛門の一子新九郎でありましたから、すわと動搖しました。

散々の強訴を企てた兇徒嘯集の張本は彼の父であつて、この度は、讃岐州を盗んで江戸の神社奉行へ訴へに出かけたのも、この男の父新右衛門である。その忤が、この深夜にお山へ入り込んだ。現に悪僧栗學が殺されてゐる。人を殺し、物を盗み、その上に一山へ火を放つつもりで、この小忤がやつて來たのだ、以後の見せしめに、屹度、重い處分を加へねばならぬ。

併し、その翌朝取調べて見ると、奇怪なのは、悪僧栗學を殺したのが新九郎

の仕業ではないといふことです。成程、深夜にお山の境内へ忍び込んだのは悪いかも知れないが、物盗りはもとより、人を殺した覺えなどは微塵もないといふのが新九郎の答辯です。また、實際の形跡も其の通りで、どうも、新九郎が殺したものゝやうには思はれないのです。さらば何者が彼を殺した。蓋し山へ入り込んだのは新九郎一人ではあるまい。きつと同頭の者があつて、牒し合はせて、先へ忍び込み、栗學に見咎められて、それを殺して立ち去つたものであらうとの見解です。それが爲に新九郎は拷問にかけて、其の同類を白状させやうといふことに定まると、そこへ、のそり／＼と枯木のやうに歩いて來たものがあります。

『栗學を殺したのは、わしぢや、わしが此の短刀で、あの男を殺してしまつたのだから、わしを罪にして呉れ』

學道をはじめ、並みゐる人々の前へ、血に染みた短刀を抛り出したのは、思ひきや、一山の變物、良道法師でありました。

十二

高野山、金剛峯寺の大寺院で一山の大法議があるといふ日。

貫主、寺務檢校法印大和尚妙海が正面の貌に嚴かに着座する。坊々、谷々より集まる住職幾百人、錦欄の法衣、色々の衣、秋の紅葉を見るやうです。

それ／＼の式が終つて、法印大和尚が、徐ろに開會を宣し、右の第一座にゐた興山寺學道を顧みて、

『興山寺、先づそなたから申して見られよ』

そこで興山寺學道が、仰せを畏んで、附添の從僧の手から紫の帛紗を受取つて机の上に置き、

『こゝに潜越ながら學道より各々方へ御相談に及ぶは別儀にあらず』

と前置をして、今日評議の問題とされてゐる、嶽辨天の頂を切り拓いて、新たに辨天のお堂を建設し、佛法の嚴飾を示し、當山の繁榮を増し、また當代貫主の法徳を後世に遺す記念にしたいとの計畫と設計との要領を述べました。

さうすると左手の第三座に控へてゐた聖方の大徳院宥乗といふ老僧が、

『堂宇建立の企は、まことに、結構ではござるが、さて、その費用でござる、一體、どれほどのお見積りでお建てになる』

この老僧は、學道よりは、いくらか先輩で、日頃、學道の處置を餘り快くは思つてゐないのです。

『此の見積り書を御覽下さい』

見積書を取つて手から手へと渡す、宥乗の手に渡つた時に一通り讀み了つて「え、と、總豫算は十五萬兩とある、そのうち二萬兩が本山の御金藏から出て、八萬兩は全國の信徒より、五萬兩は領内の人民より取り集めるといふ見當でござるな」

『その通り』

學道がチロリと宥乗の面をながめる、宥乗は見積書を下へさし置いて、

『拙僧には此の見積に少々異存がある』

と云ひましたから、一座の者がヒヤリとしました。學道に向つて、異議を立てやうとするものは、恐らく此の老僧の外にはあるまいと思はれたから、老人の冷水と思ふものもあれば、内心に痛快を叫んでゐる者もあります。そこで學道は屹度宥乗の面を睨み、

『此のめでたき御計書に異存があるといふは不祥じや、大和尚の御法徳にもかゝる儀、其の理由を承りたい』

宥乗も負けてはゐません、

『堂宇建立の企は、まことに結構でござるが、今日、十五萬兩といふ大金を募集するといふことがなかくの問題でござらう、先づ領内二萬四千石の頭へ五萬兩の割當といふのは、二石に就て、ほど一兩に當る、これは随分荷重な負擔ではないか、百姓のうち難儀を致す者はないか、その邊をよく御省察あつて然るべしと思ふ』

『成程、二石一兩は、ちと重いかも知れぬ、併し、それは三ヶ年賦にして一年僅に二分に足らぬ負擔、多年當山のお蔭を蒙る領内の人民、その位の負擔は喜んで應ずるに相違ござらぬ』

「いや、必ずしも左様ではござるまい、聞く處によれば此の頃領内の人民は、當山只今の政治向を非常に怨んでゐるといふことぢや、それにまた此の追目をかけるといふのは忍び難い事に思はれるがのう」

「拙僧は左様に思はぬ……」

こゝで興山寺の學道と、大徳院の宥乗とが、火花を散らして論戦に入らうとするのを、大和尚が抑へました。

「兩人共鎮まるが宜しからう、大徳院の云ふ所は民を思ひ、興山寺の申す處は佛法を思ふ、何れも其の真心に變りはなし、打ち釋けて穩かに相談をするが宜しい」

「ハーツ」

兩僧が平伏すると大和尚が、

「さて興山寺には、百姓の難儀にならぬやうに、其の費用を調達する見込があるか」

「恐れながら、その邊、興山寺にお任せ下さらば、成案を具してお目にかけてまする」

「よし、興山寺が責任を以て成さんとするならば大徳院にも異議はあるまい、一座は如何に思はるゝ」

貫主の一言は九分九厘まで興山寺に傾いてゐるのだから、最早論難の餘地はありません。

大徳院の宥乗も是非なく其處で論難の口を噤みましたが、

「然らば、勸化割當のうち、領内百姓より取立ての分五萬兩だけは興山寺へ仰せつけられたく存じまする、我々は、堂上、諸大名、諸國の信徒より募集の

分によつて、それ／＼盡力を致したく存じまする』

領内の者に此の上手をつけるには忍びないといふ心から斯う云つたものでありますが、學道は主唱者でもあるし、自分一手にすべてを引受けてもやり通す覺悟でゐたのですから敢て辭むことはありません。そこで領内の取り立てと、作事一切の責任を學道が、改めて貫主大和尚より仰せつけられて其の日の會議は終りました。

興山寺は己れの提案が無訂正のまゝ通過したものですから、意氣揚々として會議を引上げたが、心ある一方には、その結果を憂慮して非常の事が起らなければ宜いかと憂慮するの色が深くありました。

斯くて、興山寺學道は意地にも此の度の建築を見事に成し遂げねばならぬ責任から、それには先づ領内の重立てる者を手懐けて置く必要があるもので、之の會議の後、數日を隔て、五十二村の重なる名主村役人等を興山寺に招待しました。

その頭数を揃えて置いてから、今日は不思議に學道が打ち釋けて愛嬌を振りまいてゐるから、招待された連中が却つて氣味が悪いのです。

『さて』

と云つて説き出した一條は案の如く、辨天堂建立の大計畫であつたから、うんざりして、この位苛められてゐる上に、また結構なお堂が建てられるのかと思ふと、涙のこぼれるほど有難い思ひをしないわけには行きません。處がまだ割當のお沙汰は下らないで、

『さういふわけで、此のお堂は後世までも残るのであるから、別に其の境へ一つの大きな石碑を立てる、その碑面へ上は大和尚より下は我々の姓名を刻んで

遺す、従つて其の方達の姓名も、大和尚はじめ我々と同列に後世に遺るのじや、これより名譽なことはあるまい』

子供に飴を與へるやうなことを云ひ出したが、質朴無智の連中には、興山寺様から、こんな優しい言葉をかけられた事の光榮を身に餘つて感泣しやうとしてゐるものもないではありません。

それを學道は見渡して置いて、

『時に……そのお堂建立には十五萬兩の費用がかゝる！』

さてこそ勘定書が出て來たから、有難涙をこぼしかけてゐた者まで、急に其の涙を途中で引込ませてキョトンと學道坊の面を見上げたものもあります。

學道は平氣な面で、

『併し、その十五萬兩とても、それをそつくり其方達の村にかけやうといふの

ではない、領内より取り集めやうといふのは、そのうちのホンの僅かの部分で、

五十二ヶ村より五萬兩に過ぎない、これは大和尚よりの御懇命で、學道よりも

其の方達に折入つて肝入を頼むのだ』

學道が今まで領民に向つて頼むといふやうな事を云つたことがない。それだけ事が大きいのだ。五十二ヶ村に五萬兩が何でホンの僅かだ。一同は開いた口が塞がらないでゐると、學道はなほ一層猫撫聲で、

『その五萬兩とても一ヶ年に出せといふわけではない、三ヶ年に別けて納めても苦しくないといふ大和尚の有難き御沙汰である』

成程これは有難き御沙汰に違ひあるまい、今まで随分有難い恩ひをさせられた上に、又しても此の有難い御沙汰であるから何とも返事の仕様がありません。若し、この席に戸谷新右衛門でもゐたら、黙つては引込んでゐるまいが、新右

衛門逃走の後、骨抜きにされたやうなものです。そこを學道はなほ見澄まして、

「尚ほ其の上に大和尚より此の結構なる御堂建立の前祝ひとあつて、恐れ多くも畏き御方より下し賜はりし御盃に形どりたる、これなる一組を一同に配分せよとの仰せであるぞ、有難く御請するが宜い」

その時、小坊主等は臺の上に五合榭ほどの桐の箱に萌黄の紐のかゝつたのを幾つも運んで来て、それを名主共の前へ一つ宛並べると、學道が一冊の帳面を出して、

「それで村々の割宛ては此の通り當方で大略見積つて置いた、これによつてそれ／＼喜捨を募つたが宜からう、先づ當年の暮まで一萬五千兩だけを集めるやうに」

其の帳面を手近の名主に渡すと、黙つてそれを拜見したものが次へ次へと廻す。一巡して元へ戻つたが、うんだともつぶれたとも云う者がありません。その時に學道が威壓的に、

『どうじや、この邊で異存はござるまいな』

「へい、私村方だけは異存がござりませぬ、仰せの通り三ヶ年の間に、お割當だけの御用は勤めますでございます」

と大膽にも承服の旨を答へてしまつたのは誰あらう、名倉村の名主で芳野の父の甚内であります。

他の一同の者は其れを聞いて飛んでもない事を云つて呉れたものだと思つて、學道は思ふ壺です。

「甚内、其の方が眞先に承知して呉れたのは頼もしいことじや、よつて、石碑

への名は其の方を村々の筆頭に刻むことにして、その次は』

村々の名主の面を見渡したが、次は返事をする者がありません。忪へ兼ねて口を切つたのが賢堂村の孫太郎であります。この人は戸谷新右衛門の弟であり新九郎の叔父に當る人です。

『興山寺様はじめ、御一統の皆様へ申し上げます、お堂御建立の事は、まことに結構でございますが、その費用の取り集め方につきましまして只今甚内殿は即座にお引受けになりましたが、何しろ、斯様な儀は大事でございませうから、一旦、村方へ引取りました上で、改めて御相談の上に御返答を致すのが順序かと心得まする』

と云ひ切ると、一同よく云つて呉れたと思つて、それに力を得た向副の彌右衛門といふのが、

『左様、左様、孫太郎殿の仰有る通り、これは村方へ歸つて一應相談の上で御返事を申上げた方が宜からうかと心得まする』

『何卒、左様なことに願ひたいもので』

我もくと、孫太郎説に傾いてしまつた時に、興山寺學道の面の色が見る見る變つて孫太郎を睨みつけました。その面色を見て、また／＼慄え上つたものがあります。孫太郎の身の上に来る復讐の怖るべきことに慄え上がったものがあります。

『宜しい、歸つて相談を致せ』

學道は此の場を立つてしまいました。

高野山の登り口の學文路のはづれに三抱えほどある大きな枝垂櫻がありま
す。

その櫻の木の下に小さな掛茶屋があつて客を休ませてゐる。人はこれを櫻茶
屋と呼びます。店には二十七八になる垢抜けのした年増が一人愛嬌よく客を迎
へたり送つたりしてゐました。此の年増を人は

『櫻茶屋のお兼さん』

と呼んで、枝垂櫻と同じことに此の街道の名物として居りました。お兼さんは
土地の人ではありません。江戸から來たとか、名古屋から來たとか云はれてゐ
ました。

『やれ／＼草臥れた、時候は秋でも歩くと中々熱いわい』

そこへ大きな風呂敷包みを脊負ひ込んだのは此の界限に小間物を賣り歩く

久八といふ若い男です。

『おや久八さん、お珍しいこと』

お兼は笑顔に云うと、

『オ、お兼さん、相變らずお綺麗だね』

剽軽な面をしてお兼の面を見ながら煙草入れを取り出し、

『私も斯うやつて毎日界限を賣つて歩き、随分、女の子も見てゐるが、名倉の
名主様のお嬢様と、櫻茶屋のお兼さん、先づ、これに及ぶ容色はありませんな
あ、感心々々』

馬鹿口を利き出すとお兼が、

『久八さん、お世辭も大抵にしないと、女は増長をするものですからね』

『増長結構、うんと増長をしていたゞきたいものです、何しろ、名倉のお嬢様

はあの通り身投げをなすつてしまつたので、今は、お兼さんの一人天下といふものだ』

『まあ、お茶を一つお上りなさいまし』

『いや、これは〜』

お茶を推し進めて、尙ほもお兼の後ろ姿をデロ／＼とながめながら、
『名倉のお嬢様が櫻なら、櫻茶屋のお兼さんほ牡丹といふ處だらうねえ、世間
見ずにはあのお嬢様ぶりが宜からうが、酸いも甘いも噛み別けたといふのは、
やつぱり此方のお兼さんの年増振りに打ち込むだらう、何しろ坊主と杉の木ば
かりの高野山の下で、お兼さんのやうな別嬪が拜めるんだから、えらい功德だ
と云つてゐますせ、今時の高野の坊さんに百萬たらのお経を上げてもらうより、
櫻茶屋のお兼さんに一杯のお茶をいたゞいた方が功德があるつて、皆んなさう

云つてますせ』

『どうも有難う、それでは、功德のある其のお茶をもう一つ差上げませう』

『これは〜、斯うしてお兼さんに酌をしていたゞくと番茶も灘の生一本に飲
める、男冥加なわけさ、あ、御注文があつたんだ、冗談を云つちやゐられねへ、
お兼さん、どうも御馳走さま、ドッコイショ』

久八は大急ぎで荷物を擔ぎ出して行つてしまいます。其のあとでお兼は茶道
具に布巾をかけてゐると、

『御免』

と云つて表から入つて來たのは、弟貞助を十文字に脊負ひ、長い刀を差し、草
鞋穿きで、手に木の杖の太いをついた若者、これぞ郡山の浪士横川早苗であ
りました。

「入らつしやいまし」

早苗が椽臺に腰を卸ろすとお兼がお茶を持って來ます。早苗は帯を解いて貞助を椽の上へ卸ろして、お茶を飲み

「お女中、大ぶ、紅葉も見事になりましたな」

「左様でございます、花の時分と紅葉の時分とが一番眺めが宜しうございます、旦那様はお山へ御參詣でございますか」

「イヤ、身共は此れより和歌山の城下へ出やうと思ふものじや」

「左様でございますか、それは中々御遠路でございます」

「和歌山までは此の道を真直に參つて紛れるやうな事はござるまいな」

「え、もう、この紀の川の出る處が和歌山の御城下でございますから、川にさへ附いてお出でになれば間違うやうな事はござりませぬ」

「如何さま左様でございますらう、あのお女中、相濟まんが白湯を一つ貰いたい」

「はい」

お兼が湯呑に湯を汲んで盆に乗せて持つて來たのを早苗が取り上げて弟貞助を顧み、

「貞助、此處に湯があるから一杯飲め」

「はい」

貞助が見えぬ眼で手探りに其の湯呑を受取らうとして誤つて引くり返し、そこら一面を湯の海にしてしまひました。

「これは飛んだ粗忽なことをした」

早苗が驚いて手拭を以て拭かうとするのをお兼が押し止めて、

「いえ、宜しうございます、こゝに雑巾がござります」

「甲斐々々しくそれを拭きながら、」

「あの、お坊ちやま、お眼が悪くてゐらつしやる？」

「ハア永らく眼をわづらい、昨今は餘程重くなつた故、和歌山城下の然るべき醫師になりかけようと存じ、斯うして連れて参つたわけでござる」

「それは、御心配の事でございませう、お可哀さうに」

と云つてゐる處へ、遽かに表の人通りが烈しくなつて、皆んな穩かならぬ面色をして、川原の方へ群がって行く光景が何か事ありげでしたから早苗が、

「お女中、あの人集りはあれは一體何事でござるな」

尋ねて見ると、お兼は急に氣がついて、

「お、その事でございます、今日は紀の川原に大變なお處刑がござりますので」

「ナニ、お處刑」

その不祥な一語に早苗の胸が何となく噪ぎました。

「一體何者がお處刑にかゝらうといふのでござるな」

「まあ、お聞き下さいませ、今日のお處刑位可哀相なものはございませぬ」

お兼は涙ぐんで語りはじめました。

「全く罪の無い、若いお立派なお方がお命を取られるのでござんすから、ホントに時世時節とは云ひながら情けないこととござります」

「フム然らば冤の罪に落ちて今日お處刑にかゝらうとする者があるのだな」

「はい、その通りでございます、大きな聲では申されませぬが、この頃のお山の御政治向はそれは、非道なものでございます」

「横川早苗も高野の悪政の事は充分に知つてゐます。」

「して其のお處刑になるといふのは、お山の人か、但しは領内の百姓達か」
 「あの、それは、わたくし共も度々お目にかゝつた事がございます、つい此の
 先の島野村のお庄屋様の御子息新九郎さまと仰有るお方が今日紀の川原でお處
 刑にかけられるのでございます」

「ナニ、島野の新九郎！」

横川早苗が眼に血を濺いで立ち上り、

「して、そのお處刑場までは、どちらへ如何參つて、どの位の道程がある」
 お兼は其の只ならぬ容子を怪しく思ひながら、

「これから坂を下りますれば、もう眼の下に見えまする、道程にして十町ほど
 もござりませう、お處刑は八つとお觸れでございました、あの旦那様も御檢分
 にゐらつしやいますのでございますか」

斯う云はれて横川早苗が、

「コレお女中、何を隠さう、身共は大和郡山の浪士にて横川早苗と申す者、今
 日お處刑になるといふ戸谷新九郎とは切つても切れぬ義の縁がある、これより
 驅けつけて、其の危急を助けねば相成らぬ」

と云ひ置いて此の店を走せ出やうとする時に弟の貞助が、

「兄上、早く行つて助けて上げて下さい」

と言葉をかけました。

その聲に横川早苗が思はず振り向いて弟の面を見ると熱い涙がハラリと落ち
 ました。暫らく弟の面を見つめてゐたが、やがてズカ／＼と立ち戻りお兼の前
 へ来たかと思ふと、そこへ兩手を突きました。

「袖摺り合うも他生の縁とやら、お女中、初対面ながらお見かけ申してお願ひ

がござる、所詮仕損ずればのがれ難い某の命、萬一、望みを遂げるとも、二度
 と此の處へは歸られまい、就てはこれなる弟の行末、拙者に代つてお見下さ
 ざるまいか、横川早苗、一生の御恩、この通り手を突いて頼み入る」

横川早苗はお兼の前へ両手をつき涙を流して頼み入りました。

「あれ勿體ない、わたくし風情に、どうぞ、お手をお上げ下さいまし、エ、
 もう、弟御様のお身の上、及ばすながら、わたくしが何處までもお引受け致し
 まする、どうぞ、お心置きなくお出で下さいまし……」

「それを承つて安心」

早苗は感餘りあつて言葉短く、貞助の方に向つて、

「貞助、よく聞け、兄は今義によつて戸谷新九郎を助けに行く、汝とは、これ
 が生別死別とならうも知れず、縁あらば再び此の世で逢へるが、運拙くば兄は

一足先に彼世なる父母の下に行きて、汝の來るを待ち受ける、それまでは汝の
 身の上は、これなるお女中に頼んで置いた、このお方を兄とも姉とも母とも思
 ひ、随分壯健に暮らせよ」

と云ひながら懷中を探つて取り出した古錦襦の袋、

「貞助、これは家に傳はる系圖と、菊一文字の短刀じや、これを汝に遺して置
 く、別に金子百兩、これは武士が嗜みの貯へじや、お女中に預けて置く」

お兼は、それを聞いてわつと泣き伏してしまひました。

今は思ひ置く處なしと横川早苗が、其處にあつた手桶の中の水を柄杓でグツ
 と一口飲んで、大刀を揺り上げ、眞一文字に紀の川のお處刑場を差して馳せ出
 しました。

向ふ岸に名倉、此方は九度山の森を見るところ、紀の川原に今朝から眞黒な人集りがあるのは、此の日、戸谷新九郎が處成敗にかゝつて獄門にかけられやうとする、そのお處刑を見んが爲であります。

刻限になると、白衣を着せられた新九郎が疲せ馬に乗せられて、山から刑場へと送られて來ます。群がる見物は、新九郎の爲に涙を流して同情するけれども、如何ともする事が出来ません。

形の如く、先を拂つて、矢來の一方口から入ると荒蕪の上へ引き据ゑられる。檢視が居並ぶ、太刀取りが後ろへ廻る、寺役人が罪狀を讀み上げる。夜陰、高野山を騒がし、番僧栗學を殺せし罪によつて獄門にかくるといふ趣旨を讀んで聞かせて、さて、斬り手が刀を抜いて水をかける。矢來の外の群集は喚と聲を上げて南無阿彌陀佛を唱へる時に、其の群集を突きつけ跳ねのけて、メリメリと

と矢來を破つたのは横川早苗であります。

『その處刑待つた。大和郡山の浪士横川早苗が不服なり』

刑場へ跳り込むと、抜く手も見せず、飛びかゝつて太刀取りに一刀を浴びせて新九郎を横抱きに引かゝへました。

『それ狼籍者』

鼎の湧くやうな騒ぎになつて、早苗を取つて押へやうとするのを、片手に振りかざした刀で縦横に切つてまくり、遂に、新九郎を乗せて來た疲せ馬の處まで來ると、ヒラリと其れに飛びのつて、手綱を打ち斬り、一方口から紀の川の眞中へ馬を乗り入れてしまひました。

幸な事に、見物の群集が、雪崩を打つて來て、新九郎を追ひかける刑場の役人や捕方を押し隔てゝしまつたから、疲せ馬へ乗つて走り行く二人の姿を遠く

ながめながら、どうすることも出来ません。そのうち、見物は、高野の役人に力を合せて二人を追かけるやうに見せて、いよいよ其の間を押し隔てしまつたから、遂に力及ばず二人を取り逃がしてしまひました。

十四

「櫻茶屋へ妙な子供が来たな」

「左様さ、ついに見かけなかつた子供だが、何處から連れて来たのだらう」

「ありや、お兼さんの隠し子なんだ、今まで里へ預けて置いたんだが、この間引取るやうになつたのだ」

といふやうな噂の立ちはじめたのは其の後の事でありませぬ。

お兼が毎日貞助を連れて店へ出るものだから忽ち此んな噂の起つたのは無理

もありませぬ。あれはお兼が昔し契つた男の遺身だといふことに略ぼ評判が定まつてしまつたやうです。その男といふのは武家か町人か色が白いか黒いかといふやうな評判も初まりました。けれどもお兼は笑つて何とも返事をしません。その癖、貞助を可愛がることは、よその見る目も羨ましいほどです。

「お女中さん、兄上は何時歸りませう」

貞助が尋ねると、

「近いうちにお出でになるさうですけれど、お兄い様がお歸りにならなくなつても、わたくしが附いてゐればいゝでせう」

「でも兄上が来て呉れた方がいゝよ」

「あれ、そんな事を云つて、貞助様、お兄様がお出でになつても、わたしは、あなたを歸しませんから」

「あゝ、お女中さん、お前も、わたしの家へ一緒に来るといゝね、お前が本當の、わたしの姉上になつて呉れると、わたしは嬉しい」

貞助に何氣なく此なることを云はれて、お兼は何となく恥かしい。

「貞助様、そんな事を云ふものではありませんね」

打ち消すやうなことを云つて見たが貞助が可愛らしければ、その兄の早苗も懐しいものです。武士の身として茶屋女風情に手を突いて頼む心根、それが色でも戀でもなく、お兼の心を動かして、その度毎に、貞助が可愛しくて可愛しくて堪りません。

「あの貞助様、お兄様は、お幾つになります」

「兄上は二十七」

「それで以前はあの郡山の御家中に勤めておゐでになりましたの」

「あゝ、横川の家は郡山の藩中で五百石、馬廻りです、浪人しない前は兄上は立派な大小を差し、わたしも羽織袴に小さき刀を差して御城下を通ると人が頭を下げました、それが浪人すると兄上は、あの通りの粗末な身なりで、黒駒村に獵師をすることになつてしまひました」

「まあ、そんな結構なお身分でございましたのに、今は随分御苦勞をなさいます」

「それでお女中さん、お前の家も、以前はさむらひかえ」
 妙なことを貞助から尋ねられてお兼は、

「いゝえ」

と頭を振りましたが、早苗兄弟は零落しても、もとは五百石の家柄、それに引かへて、身分は賤しい茶屋女風情と思ふと、何とも云へない情けない心が湧い

て来たと見えて、

『いゝえ、わたしの家はさむらひではございませんでした』
と答へて面をそむけます。

此の時分にお山の方から豫て見知り越しの興山寺の役僧が大工木挽のやうな
のを数名引き連れて、この茶屋の前まで来ると立ち止まつて、彼の大きな枝垂
櫻をためつすがめつ眺めはじめました。

『成程、これならば思ひ通りの板が取れませう』

大工が云ひました。

『宜ければ早速仕事にかゝれ』

役僧が權柄づくに云ひつけしました。

『承知致しました』

木挽が道具を卸して櫻の木へ上りはじめる。木の幹へ幾筋も繩を張る、下で
は鋸、斧、槓等の道具調がはじまる。

さいせんからの容子訝かしと店頭からながめてゐたお兼の傍へ、棟梁がやつ
て来て、

『お兼さん、お寺様の云ひついで今日から此の櫻の木を伐り倒しにかゝるんだ
がね、お前さんの店へも枝葉が落ちるだらう、氣を注げて下さいよ』

これを聞いてお兼が喫驚しました。此の櫻の木があるが故に此の茶屋がある、
櫻の木を伐られるのは茶屋を潰されのと同じことですから、

『まあ、此の櫻の木をお伐りなさるの、さうして如何なさるつもりなの』

『今度出来る辨天堂の天井の板になさるんだ、それで毎日、斯うやつて御領内
の目ぼしい木を伐つて廻るのさ』

棟梁は暢氣な面で、こんな事を云ひました。お兼は何と思つたか、すかくと役僧の傍へ驅けて来て、

『和尚様、お願ひでござりまするから、此の木だけは助けて置いて下さいまし』

法衣の袖に縫るのを役僧は冷笑を含んで見下ろしてゐます。

『人間の命乞ひといふのはあるが、樹木の命乞ひは珍らしい』

ジロ／＼とお兼の艶な姿をながめてゐるだけです。

お兼は躍起となりました。

『いゝえ、木にも命はありまする、この櫻の木には人間と同じやうな血が通つて居りまする、ですから、わたくしが命乞ひを致すのでございます』

『ハ、ア、三十三間堂の棟木には人の魂が宿るといふことはあるが、この櫻の

木には茶屋女の命でも宿つてゐるのかな、それで往來の人を惱ましては尙更らあぶない、罪障消滅に伐り取つて辨天堂へ納めるに限る』

坊主がヒヤカすのをお兼は耳にも入れません。

『いゝえ、そのやうな命ではござりませぬ、此の枝垂櫻が春になつて花が咲きますと、往來のお方があゝ美しい櫻だと仰有つて喜んでお通りになります。夏になりますと、此の櫻の木蔭が、よい休み所となりまして、街道の商人衆や、馬方衆までが汗を拭いておゐでになります、この木に命があればこそ、斯うして人様の爲に良い休み所となるのでございます、それをむざ／＼お伐りになつては、來年からは美しい花も見られませぬ、涼しい木蔭も無くなつてしまひます、それで、もう此の街道は淋しい淋しいものになつてしまひます、この櫻をお伐りにならずとも、他に伐る木は幾らもございませう、どうぞ、これだけはお助

けなすつて下さいまし』

苦い面をして其れを聞いてゐた坊主は、

『ハ、それはお前のお爲ごがしといふものだ、それよりは、此の木を伐られると、店がさびれて腮が乾上がると正直に打ち明けた方が可愛ゆいぞ、成程、斯うして置けば道を通る人の幾分かの助けにはならうが、伐つてお堂へ納めれば其の功德は千萬無量じや』

『いゝえ、左様ではござんすまい、斯うして花を咲かせた方が辨天様のお思召に叶ひませう』

『辨天様の思召はお前達の知つたことじやない、さあ、木挽、早く一斧入れて見ろ』

『よいしよ』

斧を木の根に一つ下ろすと、バツと木の肉の一片が飛ぶ。

お兼は我を忘れて木挽の傍へ駆け寄つて、二番目の斧の前へ立ち塞がりました。

『お前方、どうでも此の木をお伐りなさるの』

『お山からのお言ひつくだから仕方が無えや』

邪魔になるからお兼を突き飛ばしました。

『あれ』

突き倒されたお兼は、また起き上つて斧の前へ立ち塞がらうとする、店の中から、貞助が探りくくに出て来て、

『お女中さん、怪我をすると危ないから此方へ来てゐなさい』
袖を引かれてお兼は力なく泣き崩れました。

『此の櫻の木を伐られてしまつては、わたしはもう此の土地にゐる氣はございませぬ、お山の御僧様、ついでに此のお茶屋も壊して下さいますし、木挽さん、その斧で、この茶屋の柱も伐つてしまつて下さい、其の櫻が倒れると一緒に、このお茶屋も潰れてしまつた方が宜うございます、さうして、櫻茶屋のお兼も此の土地を離れます』

こゝに來た役僧といふのは、何か事更らにお兼に遺恨があつたのかも知れませんが、掻き口説くお兼の言葉に微塵も同情を持たないで、

『面白い、願ひ通り、この茶屋も壊してやれ〜』
木挽も「た心なき奴ばらで、

『さうだねえ、茶屋の柱が邪魔になつて伐りにくいから、茶屋を打壊してから仕事にかゝつた方がやりいゝやうだ、ドレ、やつゝける』

斧を振り上げて茶屋の柱にガツシと一撃を加へました。

茶屋がユラ〜と揺れて、第二撃に柱がメリ〜と裂ける。三つ、四つ、屋根と軒が傾く、落ちる、煮え立つた茶釜も、拭き込んだ茶道具も亂離骨灰の有様です。

一旦、泣き伏したお兼は、やがて冴え返つた眼をして、この狼籍の有様を凝と終ひまで見てゐました。

掛茶屋を潰してしまふと、

『さあ此れで地均しが出来た、櫻の木へ登つて先づ枝を下ろせ』

木挽共は、再び木の上へ登つて、或は鋸を入れ、或は鉈を揮つて其の枝をドシ〜と打ち拂ひ、それが亂離骨灰に潰れた櫻茶屋の死骸の上に落ちかゝります。

三年の間、雨が降つても、風が吹いても、お兼は此の茶屋の中で愛嬌よく客を送り迎へて居りました。三たび花が咲いて、三たび花の散るのを見たお兼は、この後、その花を見る事が出来ません。さしも美事の枝ぶりが荒くれな木挽の手に情容赦なく打ち下ろされてゐるのは、美しい女の手を取り足を取つて、着物から下着まで剥ぎ取つて弄ぶのに同じやうな惨虐です。

いよく、鋸が、その根元へ入らうとする時に、

「あゝ、わたしは、もう見て居られませぬ、貞助様、一緒に此處を立ち退きませう」

「お女中さん、何處へ行くの」

「これから櫻の花の咲く處へ行つてお兄様を待ちませう」

櫻茶屋のお兼は貞助の手を取つて、高野領から立ち退きました。

十五

大傳馬町の花屋といふ宿屋から立ち出でた一人の男、田舎者が公事でもあつて江戸入りをしたやうな姿です。これなん、昨夜、品川の海岸で乞食の衣裳を脱ぎ捨て、今や、斯うして時の寺社奉行お月番牧野讃岐守の邸へ訴へに出やうとする處であります。

時刻を計つて讃岐守出仕といふ間際に玄關へ出頭して、

「恐れながら私は紀伊國伊都郡島野村の名主戸谷新右衛門と申します者、高野山金剛峯寺領内の者にござりまする、お願の筋あつて罷り越しました、委細はこれなる訴狀と連判狀とにござりまする、尙ほお奉行様に私より直々言上仕りたく存じまする」

「お訴への筋があるなら地頭を通じて来い」

無論、取り合はうともしないから新右衛門はワザと大音を擧げ、

「紀伊國伊都郡島野村の名主戸谷新右衛門、高野山の暴政をお訴への爲に遙々罷り越しました、お取上げを願ひます」

「これ静かに致せ」

取り合はなかつた役人が其の大音聲にあはて、押しとどめると、新右衛門は以前にまさる大音聲で、

「恐れながら紀伊國伊都郡島野村の名主戸谷新右衛門………」

玄關から邸中突きぬけるほどの大音でしたから、足輕共が走り出して来て、

「この狂人奴」

引摺り出さうとするのを新右衛門は玄關の柱にしがみついて、

「神社奉行、牧野讃岐守様に、高野山政治向の非道をお訴へ申さんが爲、二萬四千石の總代として戸谷新右衛門が願ひに上りました」

玄關先で、大悶着が起つたから、只今、出仕の處である牧野讃岐守の耳に入りました、

「あの騒ぎは何事ぢや」

戸谷新右衛門は透かさず大音聲を張り上げて、

「恐れ乍ら、私は紀伊國伊都郡島野村の名主戸谷新右衛門、高野山政治向の非道を直々お奉行様にお訴へ申さん爲に、遙々これまで參上致しました」

牧野讃岐守は兎も角も家來に命じて新右衛門の訴状を取り上げさせ、新右衛門は屋敷へ留めて置いて、自分は出仕の駕籠の中で其の訴状を一覽するつもりであつた處が、事に紛れて歸邸の時まで其の書状を讀みませんでした

併し、歸つてから一應抑留の戸谷新右衛門を重役に向つて取調べさせる。

「高野の政治向を訴へんが爲に推参したといふのは汝か」

「ハイ、紀伊國伊都郡島野村名主戸谷新右衛門と申しまする」

「其方一人で参つたのか」

「御意の通りでござります」

「して其の方の訴への筋は」

「恐れ乍ら、差上げました御訴状に偽りはござりませぬ、尙ほ、高野山收納所

總分方の興山寺をお調べの程を願ひますれば、委細分明の儀と存じまする……

……」

併し、肝腎の訴状はまだ讃岐守は見えてゐないし、家中の重役の者とても吞込

んではゐないのだから、新右衛門の熱心もさまでは彼等の胸に響きません。

「待て、新右衛門、其方は地頭を差置いて越訴強訴の罪は辨へて居らうな」

「仰せまでもござりませぬ、國許を立つ時に一命は抛つ覺悟で参りました……

民百姓の難儀さへ救はれますれば、私骨身は粉にならうとも厭う處はござり

ませぬ」

更に動せぬ覺悟の體を役人が見て、これは手剛いと思つたか、わざと和らい

で、

「其方の申す處にも一應の道理はあらうが、素直に此の訴状を取り下げて歸つ

た方が爲にならうぞ、役向から申すのではない相對づくの忠告ぢや」

「それはまた、何故でござりませう」

「痴呆た奴だ、こゝで素直に訴状を取り下げて歸れば其方が越訴の罪も内分に

取扱はれない限りもない、若し、我を通さうとすれば其方の願意が聞き入れら

るゝまでには重き御處分が加はる、殊に高野山は外々の地と違ひ、政道にも別格のお扱ひがあると聞く、汝一人齒齧みをするとも及ぶものではなからう、神妙に時を待て』

役人が懇々と説き諭したつもりでゐたが、新右衛門が其れに服する位なら此處へ出ては來ません。

『有難き仰せながら、事の此處に及びまするまでには、地頭へも寺々へも、及ぶ限りの手を盡し、哀訴歎願の限りをつくした上の事でござりまする、我々領内の者、涙を吞んで出来るだけの辛抱に辛抱も重ねました、けれども悪政はいよく募るのみでござりまする、先づ此れを御覽下し置かれませ』

新右衛門が取り出したのは例の讃岐樹であります。

『この通り、高野の御領内では天下御法禁の樹を用ひて居りまする』

役人がそれを見た時に、さてこそと思ひました。多寡が邊士の百姓の泣き言に過ぎまいと思つてゐた處が、法禁の樹を用ふるといふことになる、容易ならぬ事件です。少くとも其の犯罪人をとらへて磔刑に處するだけのものはある。況や、それが公儀から朝廷までも別格の御會釋ある名利高野山の中に行はれてゐるといふのだから、此の事件は取り上げると株連蔓延して、近來見易からぬ疑獄となるかも知れない。此處に於て、やはり役人は取り合はずに置くが安全と思ひました。

追つて呼び出す時を待てといふ言葉で、新右衛門は牧野の屋敷から下げられてしまひました。

そのあとで味味の役人が、主人讃岐守に此の由を申上げると、讃岐守大いに驚き、最前の訴狀を取出させて讀み下し、見ると、「乍恐奉歎願候」と冒頭に

認め、その次にすつと村名を並べて、本文には

右五十二ヶ村の百姓共流涙奉歎願候儀は地頭高野山興山寺へ年貢收納之儀、
京榭を以て納め候儀を、讃岐榭を以て量り取り、剩へ讃岐榭へ種々奸造致し、
量を増加し、其上年貢米一石に付、二升づゝの差に米を添え、加之、外に見
米と唱へ、米一荷三斗につき二合又は三合づゝ、荷毎に取上候に付、累年百
姓共の困難甚だしく候へ共、御傾主の權を恐れ差控え罷り在候處、近年彌
々増長仕り一荷に付五六合づゝも取上候に付、領内年々疲弊仕り候を
見るに忍びず、一昨年冬私興山寺へ歎願に罷り出で、種々詞を盡し候處
却て咎めを請け、郷士格取上に相成候次第にて聊かも聽き届け申さず候に付、
據所なく越訴の儀恐入候へ共、今般、御駕に縊り奉願上候、何卒御憐
愍御取扱を以て京榭に相改め悪策の隱税を廢し候様、御威光にて高野山へ御

諭の儀幾重にも歎願仕り候御取扱に相成候は五十二ヶ村の百姓共多年
塗炭の苦を免れ往々渴命にも及び申まじく奉存候、御許容成し下され候
はゞ總代の私如何様の御處刑仰せ付けられ候とも苦しからず、獄中に其の罪
を俟ち奉り候、誠恐誠惶謹言頓首死罪

紀伊國伊都郡高野山寺領百姓總代

清水組島野村

新右衛門(血判)

享保四亥年十二月 日

牧野讃岐守がこれを讀んで案外の大事だと思つたから、早速駕籠を飛ばして
自身に寺社奉行筆頭松平對島守に相談しました。對島守も大に驚いて、協議の
結果、やはり取り合はないで置くに越したことは無からうといふ方針になりま
した。

そこで新右衛門が、幾度寺社奉行へ日参しても門前拂ひを食つて取つく鳥が
ありません。其の中に、芝の白金なる高野山の關東詰所では、新右衛門の行方
を嚴重に調べてある形勢がわかつたから、新右衛門はこゝに決死の覺悟で最後
の手段を取らねばならぬと考へました。

最後の手段といふのは將軍家へ直訴といふ非常中の非常手段です。

直訴の先例には四代綱吉の時下總佐倉の農民木内宗吾があります。その佐倉
宗吾には、多少の後援者が無いではなかつたが、紀州から出て來た戸谷新右衛
門にはそれが無い、たゞ一つ頼みになるのは、當代の將軍家は紀州の出身であ
つて、徳川中興の將軍と云はれる八代吉宗公であるといふことです。云はゞ戸
谷新右衛門と同國のよしみが無いとは云へない。

戸谷新右衛門は此の將軍家が新之助様と呼ばれた幼少時代からの英邁なお噂

を聞いてゐないといふことはありません。

父の紀伊大納言光貞卿が或時、子息達を召されて一匣の刀の鑿を頰たれたこ
とがある。他の若様たちは争うてお選みになつたが、新之助様のみは黙つて手
に取らうともなされぬから父の光貞卿が不思議に思はれて汝は欲しくないかと
お尋ねになつた時、いえ私はあとで其の匣ごと頂戴いたしますと云つて一座を
驚かしたといふやうな幼な物語を新右衛門も聞いて知つて居ます。

正徳六年四月二十九日、前將軍有章院様薨去、赤坂の邸内に弓を彎いて居
られた新之助様の許へ急使が立つて思ひがげなく征夷大將軍の大任を負はさせ
られた。再三の謙退も血統と人望との歸する處是非もなく、三十三歳にして天
下の大權を統ぶるに至つたといふ顛末も新右衛門はよく聞いて知つてゐまし
た。

それで將軍宣下も濟まぬうちに、第一着に、文照院家宣公が大内の不老門に
 なぞらへて勘定奉行萩原重秀に命じ七十萬兩を投じて建設せしめられた善盡し
 美を盡せる四脚門を取毀せよとの嚴命で、これには群臣も驚愕して諫言を申上
 げたものがあると、

父祖の不義を知りて改めざるは是れ不孝である、而して一刻遲緩すれば一日
 の不孝であり、一日懈怠すれば則ち天下の恥辱である。

とのお言葉で斷乎として其の莊麗な四脚門を破却され、上下皆膽を奪はれたと
 いふ改革ぶりも新右衛門は夙に承つてゐる處であります。

且又、この將軍家は母方より云へば庶腹で、正腹の方よりは常に一枚下に扱
 はれて小祿の間に人となり、嘗て四代綱吉公紀州家へ御成りの時も、この新之
 助様だけは敷居の外に伺候して居られた、その様にして幼少より浮世の波には

揉まれて、つぶさに世態人情の辛酸を知つて居られる、將軍職を承け繼いだ歳
 の六月の二十六日、初めて租税の事を聞かれ、あ、我未だ民を撫綏すること無
 くして民の貢税を受く古聖人の訓誡に違ふを恥づとあつて、兩眼に涙をたへ
 受けつぎし國の司の甲斐もなし

恵まぬ民に恵まるゝ身は

と詠まれたといふ其のお歌も新右衛門は聞いて知つてゐるのであります。

これほどの明君であるから、直接に打着かつて行きさいすれば、この將軍家
 の御胸のうちと、わが胸の中とに照らし合ふべきものがあるやうに思つたから、
 新右衛門は直訴といふ大膽にして可憐な非常手段を試みやうとする氣にもなつ
 たのでせう。

これから新右衛門は秩父板東の巡禮姿に身をやつして、日々、御府内の神社

佛閣を參詣しつゝ、將軍外出の折をうかゞつて居りました。

一つ幸ひな事は、當將軍が萬事に簡略主義の人であつたことで、勇武の氣象を獎勵の爲とあつて、月によつては二度三度までお鷹狩の催しがあります。その時は、木綿の狩装束に柿色の麻の羽織、脚半草鞋に足を固めてお出かけなさるといふ譯だから、前代までの將軍家のお鷹狩のやうに、物々しいお供もなく、仰々しい手数もかゝらない事です。道路も修繕するに及ばず、諸市は常の如く商賣を爲すべく、田野に於て鷹狩の輩に行逢うとも農夫は道を避くるに及ばず、只耕作を旨とすべしとの有難き御沙汰に、當時の百姓共を泣かせたものです。よつて新右衛門は此のお鷹狩の機會をうかゞうて將軍家の馬前を冒さうと思ひ定めました。

斯くて其の歳も暮れ、明くれば享保五年の正月。

其の四日の日早々、筑波風の烈しい中を龜井戸のあたりにお鷹狩との噂を洩れ聞いた新右衛門は、時こそ此の時と、あとを窺つたが何分警護が嚴重で寄りつけず、よんどころなく龜井戸天神に大願成就の祈請を籠めたのみで空しく立ち歸りました。

同じき十日の日が東叡山御廟へ御參詣、この時は諸大名擧つて參列し、とても寄りつけまいと思つたから引込ん考へてゐるうちに、耳に入つたのが、矢繼早に其の十二日になると又もや葛西邊にお鷹狩があるといふことの噂です。この度こそはと新右衛門が覺悟をして、その三日前に、やはり巡禮姿で、例の讚岐樹を脊中に、訴狀を挟む竹も準備して夕景からコツソリと出かけました。其の行先きはいつとも休憩所と定められてゐる小松川の仲臺院であります。

新右衛門は、隙を見て仲臺院の椽の下へ忍び込みました。この寒氣の中を二日三晩といふもの此の椽の下に忍んで暮らさねばならぬといふのは、それだけですら既に生命がけの冒険です。

幸にして檢分の役人にも、寺の僧にも氣がつかれずに、二日三晩を此の椽の下で忍んでゐるうちに、將軍家お鷹狩の當日が來ました。

空は晴れ渡り、筑波風の寒風も威を振はず。八代將軍吉宗は例の如き狩裝束で、黒く逞しき馬に乗り、井上河内守正峯、久世大和守重之、石川近江守繼茂といつたやうな錚々たる近臣都合五十七騎、いづれも將軍と同じやうな狩裝束で、狩り暮らして、將軍自らも黒鶴と鷺との獲物があつて、御機嫌がよく、狩倉をおさめて、小松川仲臺院の休憩所へ着いて、吉宗が朱總のついた竹の鞭を持つて馬上からユラリと下りて正面の床凡に腰を下ろして一同の恐悅を受けて

から、布衣以上のお供に御酒を賜はるといふ順序です。

その御酒下されが、半ばまで進んだ時に、椽の下に息を殺してゐた戸谷新右衛門が、竹の先に挟んだ書狀を捧げて這ひ出して來ました。

「恐れながら御上訴！ 御上訴！」

スワとお供の面々が立ち上がつて新右衛門を取つて押へやうとする。石川近江守は刀の柄へ手をかけて將軍家の前に立ち塞がります。戸谷新右衛門は訴狀を高く捧げて、

「恐れ乍ら、高野山の暴政に苦しむ伊都那賀兩郡二萬四千石の民に代り、紀伊國島野村名主戸谷新右衛門御上訴！」

と呼び立てた時分には、警衛の武士達の爲に訴狀は打ち落され、身體は取抑へられてゐました。

これで宜しい。もとより直接お取上げのあるべき筋ではない。たゞ、將軍家のお耳を驚かしさへすれば新右衛門の目的は達したのだから、もう甘んじて、取抑へられ、お繩を受けて引き立てられました。その引き立てる時に、ちらりと彼方をうかがうと、こちらを見て居られた將軍家の御眼ざしに、御憫察のお情けが籠つてゐるやうに、新右衛門には見上げられたので、嬉しさに、張りつめた勇氣が一時に挫けました。

そこで新右衛門の身體は警衛の徒頭土屋平三郎が嚴重に預かる。

多分、その結果であらう、間もなく、寺社方役人が電の如く高野山へ飛ぶ、その他多數の隱密が高野領内へ入り込む。聞く處によれば、あの事あつて以來、將軍家は、わが本國の領内に近き高野山の地に斯かる惡政あるは以ての外と、寺社奉行松平修理太夫に高野山の内政調査の命が下つて此の有様に至つたとい

ふこととです。

十六

『良さま、良さま、もう日が高くなつたからお起きなさい』

搔卷の上から、よく寢入つてゐる良春を揺り起してゐるのは芳野であります。

『あ！あ、久しぶりで氣が落ちつきましたから、何にも知らず寢過ごしました、お前様はいつの間にか起きました』

夜具の中から良春は首を出して芳野の面を見てゐます。

『疾うの昔に起きました、御覽下さい、この通りお膳立も出来、御飯も湯氣が上りました、早く起きて、わたしの女房振りを見て下さいまし』

「それは有難い事、どれ」

良春が起きて面を洗うと、芳野は早や、臺所の仕事を済ませて長火鉢の傍へ寄る、お膳を前にして二人が差し向ひに顔を見合せて莞爾とし、

「良さま、わたしは先つき、井戸端へ行きますと、近所のお神さんに御寮様と云はれて恥かしうなりました」

「わしはまた、昨日、隣の婆さんから旦那様と云はれました、人目には姉弟と見えぬらしう思ひます」

「それこそ本望、それと云うのも、あの時、龍王溪でお前様の言ふ通り身を投げてしまつたら、今日の日、こんな楽しい差し向ひは出来ませぬ」

「あの時はもう生きる身空はありませんでした、それを逃れて、こんな楽しい暮らしをするのも皆なお前様のお蔭、お禮を申したいほどです」

「何の、女房が夫に盡すは當然の事、あれ御飯の焦げる香ひ」

芳野はあはて、臺所へ行く。良春は火鉢によりかゝつてお茶を飲みながら過ぎこし方を考へて見ます。

これより先き、良春は戸谷新九郎を殺さうとして却つて取り押へられ、其の命を助けられたが、さて、何處へ行かう、一そ、川へ身を投げて死んでしまはうと思つたが、芳野の事が氣にかゝつてならないし、思案の末、一先づお山へ忍んで歸つて、兄弟子の良道に會ひ、其の意見を聞かうとして山へ歸つて來ました。山へ歸つて良道の室へ行かうとする途中の一室で燈火がするから何氣なく覗いて見ると、驚くべきことには其處に縛られてつながれてゐるのが芳野です。その傍に、悪僧栗學が寝てゐるから、くわつと我を忘れてしまひました。前後の思案もなく飛び込んで芳野の縛めを解き、猿轡を外して連れ出さうとし

た時に、栗學が眼を醒まして、貴様と云つて飛びついたから、あはて、さい前、新九郎を殺さうとして一旦取り上げられた短刀を抜いて無茶苦茶に突き立てました。それが、はづみで栗學の側腹を突き通すと、彼が悶搔き苦しんで荒れるのを、斯うなればもう仕方がないと、無暗に突き立て、とう／＼息の根を止めてしまひました。

さうして良道の室へ飛び込んだ時は、良道の手にかゝつて此の罪を亡ぼさうとの考へでありました。併し乍ら、良道は彼等を悪魔と云つて椽から下へ蹴落してしまひました。

良春は絶望して、こゝでも自害と思つたけれども血に染めた短刀は良道の手に取り上げられておました。芳野はその時、反抗的に、二人は、これから思ひのまゝに添ひ遂げて、この世の樂みを盡して、佛や聖の情知らずと笑つてやら

うと云つて、良春を引摺るやうにして二人で龍王溪まで落ちたものです。

龍王溪の磐の上でも良春は、死なう／＼といふのを芳野が生きやう／＼と抑えて、夜の明けぬうちにと和歌山方面を指して落ちました。その途中、芳野が持つてゐた金で、二人共衣裳を改めて、いつそ、芳野も良春も昔懐かしい京都へ落ちついて、そこで水入らずの佗住居をしやうと相談が一決して、目的通りかうやつて京都の五條あたりに小家を借り受けて新世帯を張つた今日はその第一日であります。

『さあ、御飯も出来ましたが、下の方が此んなに黒く焦げてしまひました、お汁が少し辛いかも知れませぬ、このお肴は京に珍らしいお刺身、あれ、御出家様にお魚は禁物でございましたか、それでも、もうお山の所化良春さんではなく、芳野の夫、良さまでござんすから、お肴もたと召上がれ』

良春はそれを恐悦がつて、

「芳野様、有難うござんす」

お禮を云うと 芳野はつんと濟まし、

「芳野様とは誰の事、そんな他人らしい名前は廢して、これから先は、さうさう、お芳お芳と碎けて呼んで下さいまし」

「それでは、お芳……」

良春が一口呼んで見て、

「どうやら、バツが悪い、もう一度お芳……やつぱり定まりが悪い、では、寧ろ、お芳さんと云ひませう、お芳さん、御飯のお代りを下さい」

「あい、只今、差上げまする、さあ、このお刺身をお上りなさいませ」

「いえ、今まで魚肉を口にしませぬから、何となく怖くしくて箸がつけられま

せぬ」

「まだ、そんな事を云つてゐる、わたしが、食べるやうにして上げるから」

刺身の一切を箸にはさんで良春に附きつけると、良春は迷惑な面をして、それを口にする、芳野はホ、と笑ひ、

「あの苦さうな顔わいの、晩にはお酒を飲ませて、困らせて上げますぞえ」

二人は斯うして飯事のやうな生活に耽りました。

その費用は何處から出るといへば、芳野が身につけてゐた多少の金子があるばかりです。後先の考へがあるわけではなく、別に工面の當があるわけではありません。漸く行き詰つて來るのは當り前です。さすがに良春もそれを見て取らないわけには行きません。

「お芳さん、まだお金はあるのかえ」

「エ、まだ有りますよ、安心なさい」

といふ時分には、お豆腐の代にも困るやうになりました。

芳野も、さあこれから先をと屈托しましたが、右を見ても左を見ても頼る人としてはありません、已むを得ず有りもせぬ身の廻りのものを捨賣にして、急場を繕ろつて見たが、それとて永く續かう筈は無く、いよいよ窮迫の餘り、芳野はある晩、良春に向つて、こんな事を云ひました。

「良さま、今晚、わたしは、ちよつと東山の方まで行つて参ります、歸りは遅くなるかも知れませんが、ひよつとすると明朝になるかも知れません」

思惑ありげな言葉に良春が心配して、

「お芳さん、お前が夜になつて外出をするといふのは今までに無いことですが、何處へ参ります」

良春の初々しい子供のやうな心配面を見ると芳野は、それが身に泌みるほど可愛らしく、つい打ち明ける氣になつて、

「良さま、今までお前には苦勞をかけまいと黙つては居ましたが、持つてゐたお金が皆な盡きてしまいました、それで、わたしは此れから南禪寺の傍にゐる叔母様の處へ行つて、内密でお金を借りて來やうと思ひますの」

其れは芳野が以前預けられてゐた家、良春との戀の緒も其處で開かれた家です。叔父といふのは篤庵と云つて、可なりやかましいお醫者さんですから、とても打着かれないけれども、叔母さんは優しい人だから、窮を訴へて願ひすれば聞き分けて下さるだらうと、その相談をかけて見ると、この場合、良春も止める譯には行きません。

「それでは氣をつけて行つて來て下さい、お前にはかり苦勞をかけて濟みませ

ぬ
「良さま、お前に、そんなしほらしい事を云はれると一晩でも残して置くのが
気が、りでなりませぬ」

心を残して芳野は此の家を出て行きました。やがて叔父の家の門前まで来る
には来ましたけれど、どうも鬨が高く入り兼ねてゐます。

誰か雇人でも出て来たら、そつと叔母への音づれを頼もうと思つて、そこら
をウロ／＼してゐました。

間もなく、玄關口から出て来た者があります。ハツと後退りをしながら見る
と、出て来たのは編笠をかぶり、手には三味線を抱えた鳥追姿の若い女で、十
歳位の、これも編笠に面を隠した男の子の手を引いて居りました。

「貞助様、お眼は痛みませんか」

「お女中さん、こゝのお医者さんに診てもらつてから、一日増しにブーツと明
るくなつて来ました」

「あゝ、さうでござんしたか、先生も、もう一月ほど経てば物が見えるやうに
なると仰有いました」

二人が、芳野の前を通り過しました時に、曇つた月夜でよくわからないが、芳
野は何處かで見たりやうな女だと思ひました。聞いたやうな聲であると思つて見
送つてゐる間に二人の姿は向うの角に消えてしまひました。

芳野は、まだ叔父の家へは入れません。誰か出て来よかしと思ふが、誰も出
ては来ません。行きつ戻りつしてゐるうちに、いよ／＼氣後れがしてしまいま
した。

あゝ、自分としたことが、いくら困つたにしても、此處へ頼つて来られた義

理か、そつと叔母様に會うつもりでも、自分の行方知れずになつた事の知らせが届いてる筈の、こゝで叔母様が、わたしを捉まへて放さう筈はないと今更氣がつきました。さうすれば良春さんと引き分けられるに定まつてゐる。あの良さまは、わたしの爲に人まで殺した身で、どうして此れから先が立つて行けやう、わたしも一緒に餓えて死ねばとて、別れるのは忌々、こんな怖ろしい處へ來るのではなかつた、さりとて、引き返せば、何處へ行つて、これからの身過ぎの相談をする、一層また思ひきつてと、ワク／＼してゐる玄關口で、

『金助、もう玄關を締めろ』

叔父篤庵の一聲で、芳野はゾツと身が竦んでそこを駆け出してしまひました。

『あゝ、忌々、もう、あの家の閤をまたぐ事ではない、歸りませう、歸りませ

う』

胸を撫でながら、賑やかな方へ、賑やかな方へと歩いて行きました。

無暗に歩いて行くと、何處からともなく冴え返る三味線の音色がピンと芳野の耳に響きました。耳をすましてゐると美しい音聲で投節を歌つてゐるので

會はぬ辛さを焦れしよりは

會うて別るゝ憂き涙

静かな京の宵に、鏢漚たる三味の音と、歌の調子を聞いて、芳野は泣きたくなりしました。

歌の主を見ますと、最前、子供の手を引つれて叔父の家を出た烏追姿の女であります。この時も、紛ふ方なきあの幼ない男の子を引つれて町の巷を流して

歩くものであります。

あゝ、あの女太夫も、自分と同じやうに戀故にあれまで身を落したのではなからうか、あの子供は多分、捨て、行つた薄情な男のかたみであらうが、丁度、自分が良さまを世話をするやうに、あの女太夫も貧苦のうちからあの子を育て、行くのであらうと、身につまされて感心してゐるうちに、ハタと思ひ當つたのは、自分にも相當に遊藝の嗜みがあり、三味も相應に弾ける筈である、今の急場に、寧ろ、此の女太夫に頼んで弟子にして貰ひ、門附に身を落して二人の身を過して行かう、あゝ、さうしやう、それは良い思案であつたと、芳野は遽かに光明を見つけた氣になつて、小躍りして喜びました。では、そつと、此の女太夫のあとをつけて行つて、その住居へ押しかけて弟子にして貰はうと、行き過して、芳野があとをつけて行くと知らず、彼の女太夫は訝えた調子

で、

聲に現はれ啼く蟲よりも、

云はで螢の身を焦す。

流して行くほどに芳野はそれを聞くと、歌の中に吸ひ込まれて煩惱を忘るゝばかりです。女太夫は、京の町を、よいほどに巡つて流して歩き、二條あたり

の淋しい處の、一軒の草家へ来て、隣家へ、ちよつと言葉をかけて中へ入りま

した。

この女太夫こそは云ふまでもなく、彼の櫻茶屋のお兼であります。お兼は櫻茶屋を立ち退いて、大和國黒駒村なる早苗の浪宅をたづねて見やうかと思ひま

したが、所詮近寄れません。已むを得ず和歌山へ出ましたが、いつその事、京

都へ出てしまへば生活の道も有らうし、貞助の眼を診てもらうお醫者さんもあ

ること、思うし、また、櫻茶屋の名残に櫻の花の咲く、嵐山に近いところの片田舎に落ついて、この通りの生活をしてゐるのです。

お兼が家の中へ入つて燈火をつけると、外には芳野がまだ入り兼ねてゐます。

『御免下さいまし』

やつとの思ひで芳野が案内を頼むと、

『おや、誰様でございますか』

お兼はちよつと意外な思入れで外を見やります。

『あの、わたくしは、太夫さんに少しばかり折入つての願ひがございまして厚かましくも、お後を慕つて参りました』

『まあ、わたくし風情に折入つて願ひとは何でございますか、兎も角も、お

上り下さいまし、どうぞ』

『それでは御免下さいませ』

『さあ、何卒、これへ』

燈火を掻き立て、芳野を座に招きました。

『貞助様、お前様はお先に御免蒙つてお休みなさいませ』

貞助をいたはつて先へ休ませる容子を見ると、わが子でもなし、弟でもなし、さながら主人に對するものゝやうであります。

それから、二人初對面の挨拶などが宜しくあつて、芳野は定まり悪さうに、『お願ひと申しますのは、外の事ではございませぬが、わたくしを、貴女様のお弟子にして頂きたうございます』

『え、あなた様が、こんな賤しい稼業をなさらうと仰有るのですか』

『どうぞ、折入つてお願ひ申します、今晚、通りがりに、あなた様のお歌を聞きまして、身につまされてしまひました、わたくしが、斯うして、厚かましく、お願ひ申す氣になりましたのには、随分深い仔細がございます、わたくしには、只今、頼りに致す兩親も親戚の者もございませぬ、たゞ一人の……弟がございます』

『弟さんが』

お兼は身を入れて芳野の身の上話を聞かうとしてゐます。芳野は、その文句を途中で、随分研究して来たのですが、弟……と云つたのは、可なり口ごもつた云ひ方でした。それでもお兼は氣がつかせませんで、芳野の身の上の同情する心持が面にありくと現れます。

『その弟と二人暮しの身につまりました、幸ひ、いくらか藝事の嗜みもござい

ます故、あなた様のお袖にすがつて、教へていたゞいた上に、一緒に連れて歩いていたゞきますれば、私も助かります、弟も助かります』

斯う云はれた時に、お兼は胸を打たれて貰い泣きをしました。この若い身空で、弟を養う爲に門附に身を落さうとは人事ではない、やはり自分と同じやうな不幸な身の上と、同情の餘りに快く引受けました。

『宜しうございます、さういふ譯ならば、いつでも入らつしやいまし、お互に助け合つて参りませう』

お兼は、たゞ弟の爲を思ふ姉の真心とのみ信じて芳野を憐れがり、其の晩は勸めて芳野を泊め、翌朝は早く歸しました。

芳野は思うやう、こんな稼業をしてゐながら、美しい志の人もあればあるものである。こんな人に、かりそめにも偽りを云はねばな……なかつた今日の事

情を辛く思はないではありません。歸ると良春は首を長くして待つて居りました。

『お芳さん、首尾は如何でした』

『でも、いゝあんばいに叔母さんに會つて來ました』

こゝへ來ても亦繕ろつて、強いて浮いた面を見せて、

『それに良さま、叔母様がよく、粹を通して、そつと、わたしを或る商家のお嬢さんにお琴を教へて上げるやうに手引をして下さいました』

『それは宜うござんしたねへ、私も斯うしてゐないで何か仕事をしたいものだが、うつかりと外へも出られず』

『そんな心配は要りませぬ、當分は、わたしに任せてお置きなさい』

慰めたり、云ひこしらへたりして置いて、其の翌日からお兼の處へ通ひまし

た。

そこでお兼が、三味の手や、歌の節などを教へます。下地がある上に器用ですから、二三日のうちに、すつかり呑み込みました。三日目の晩から二人で編笠をかぶり、三味を抱へて京の町を流して歩くことになりました。

貞助は隣家の婆さんに預けて置いて、七日に一度ぐらゐは、お兼が手を引いて笥庵の處へ診てもらいに行くのです。

二人の門附が追々評判になつて、待つてゐて歌を聞きたがるものも多くなり、ましたから収入も殖えて來ます。お兼がそれを適當に芳野に分けてやりましたから、お蔭で良春と二人が無事に暮らして行く事になりました。

或日の夕方、芳野がお兼の家を訪ねて行くと其の日はお兼も貞助も留守でした。隣のお婆さんが出て來ての話には、今日は太夫さんはお醫者さんへ行きます。

したとの事だから、芳野は家へあがつて二人の歸るのを待つてゐました。

芳野は此の留守宅で、たつた一人、三味の音締などをしてゐると、

『投節の太夫さんは此方かな』

大きな聲で外から聲をかける者がありましたから、芳野は

『ハイ、手前でございます』

何氣なく障子を明けますと、そこに立つてゐるのは、茶釜頭に羽織を着て、

薬籠持を従へた一人のお醫者さんであります。思はず面を見合せると、

『おゝ、お前は芳野ぢやないか』

『あ！』

芳野は夢中になつて障子をハタと締め切り、そのまゝ跣足で裏口から一目散に逃げ出しました。

『金助、早くあれを捉まへろ、あれは俺の姪に違いない』

薬籠持を指圖してゐる醫者は、芳野に取つては叔父に當る篤庵であります。

伴の金助をして、芳野のあとを追かけさせて置いて、自分は一人椽側に腰を

かけて煙草を燻らせてゐると、そこへ、お兼が貞助の手を引いて歸つて來ました。

『まあ、先生、こんな處へお出で下さいまして恐れ入ります』

『いや、今日は嵯峨の方へ呼ばれてな、その歸りがけにお前さんの處を尋ねて見たのさ』

『こんな穢苦しいところへ、ようこそお立寄り下さいました、どうぞお上り遊ばして』

『いや、此處で結構ぢや、ナニ、行違ひになつたと、さうか、それはお氣の毒』

であつたな、さあ、坊や、お眼をお見せなさい』

篤庵は其處で貞助の眼の診察をはじめました。

『この分ならば、もう十日も経つと、ハッキリとは行かないが、ぼんやり物の見えるやうになる……時に、太夫さんや、お前さんの家に、たつた今、若い娘衆が一人見えだが、あれは一體何處のお方ぢや』

『あゝ、それではお芳さんと云つて、わたくしの朋輩でございませう』

『ナニ、お芳、フーン』

篤庵が考へ込んだが、

『して、そのお芳さんといふのはお前さん、長らく御懇意かね』

『いゝえ、近頃お近づきになりましたんですが、お若いに似合ず感心な方でございませう』

『へーい、若いに似合ず感心……』

『只今、弟さんと二人で暮らしておゐでになります、よく弟さんの面倒を見ておやりなさいませう』

『へえ、弟と二人で……さうして家は何處にあります』

『五條の方とか聞いて居りましたが、まだわたくしはお尋ねをした事はございませぬ』

『はゝあ、左様か、今度來たら、一つその居處を聞いて置いて下さらぬか、ちつとばかり心當りがあるんだが』

『宜しうございます』

話をしてゐる處へ、お伴の金助が息せききつて歸つてきました。

『旦那様、まことに濟みませんが、どちらへ逃げてお出でなすつたか、薩張り

わかりませんでございませす』

『は、あ、そいつは失敗つた』

篤庵が失敗つたといふ面を見て、お兼が不審に思つてゐるうち突然立上り、

『金助、さあ歸らう』

『只今、お茶を一つ差上げませす』

『いや、お茶も要らん、今の話しの娘の事は頼みましたぞ』

『承知致しました』

篤庵は金助をつれて、さつさと歸つてしまひませす。

あとでお兼は貞助の手を取つて座敷へ上つて見ると、芳野の三味線が抛り出してあつて人が居ない。裏口を見ると、芳野の下駄が脱ぎばなし。ハテ、如何したものだらうと、待てど暮せど、お芳の姿が見えませせん。隣の婆さんに聞く

と、たしかに來て座敷へ上つて待つてゐたのだといふ。あまり不思議だから其の晩は、稼業を休んで、貞助と共に寢に就かうとする時分になつて、裏の戸を
ホト／＼と、

『姉さん、姉さん』

その聲は芳野のお芳の聲であります。

『お芳さん、まあ如何したのです』

『姉さん、どうも濟みませんでした、急に用事が出來たものですから』

芳野は、いつになく用心深く上へあがつて、

『姉さん、色々お世話様になりましたが、わたしは今晚限りお別れを致したうございませす』

お芳が改まつて丁寧な暇ををするものですから、お兼はいよく煙に捲かれ

てしまい、

『まあ、如何したのですか、急に、そんな事を仰有るのは』

『これには深い事情があるのですが、何にもお聞きなされずに、わたしを、お見捨てなすつて下さいまし』

『それは、あなたの御自由ですけれど、それにしても、あんまり突然ではありませんか、お芳さん、お前様も弟さん一人の淋しいお暮らし、わたしも此の通り主人の御子息と二人暮らし、同じやうな身の上ですから、お互に何處までも助け合つて行きたいと、それを樂みにしてゐましたのに、急に今夜になつてお別れとは、あんまり急で心配になるではありませんか、あなたの御容子を見ると、何か大變な心配事がお出来になつたやうですが、さういふ時こそ、眞先に、わたしに御相談をして下さつても宜いではありませんか』

啣んで哺めるやうな親切な言葉を、芳野は聞きながら喚と泣き伏して、

『姉さん、あなたから、さう仰有られると、わたしは濟みません、いづれ、この胸の中を皆な打ち明けて御相談を申上げる折もございませうが、今晚の處は何も仰有らず、このまゝお見捨てなすつて下さいまし』

斯う云つて芳野は泣き面を隠しながら、座を立つて、裏口から下駄を穿きかけやうとしますから、お兼は

『まあ、お芳さん、あなたが云へないことを強いてお尋ねして困らせるやうな事は致しませんから、もう一度、こゝへお座り下さいまし、このまゝ、お前様を歸すのは、どうも氣がゝりでなりません』

『姉さん、どうぞ堪忍して下さい』

お芳は精一杯に袖を振りきつて外の闇へ駆け出してしまひました。

お兼はつゞいて外まで追ひかけましたけれども、暫くして何處へ行つたかわかりませんでした。せめて、居處だけでもハッキリ聞いて置きたいと思つた。それもあだになつて呆れるより外はありません。お兼は心配で心配で其の夜は眠れませんでした。

斯うし 芳野は悄悄として五條の佗住居へ歸つて來ました。

「良さま、わたしは今晩、叔父に姿を見られたから逃げて來ました、もう當分、外へは出られませぬ」

「あゝ、危ない事、私も、この京の地は危ない心持がして落々住んで居られませぬ」

「寧その事、大阪かお江戸へ逃げてしまひませうか」

「わしも、そんな事を考へてゐますわい」

「それでは大阪へ逃げることにしやうじやありませんか」

「さうしませう、それにしても京は二人の故郷、この花を見ないで逃げるのが心残り故、明日は悠くり嵐山を見物して、それから大阪へ逃げませう」

「まあ、こんな急場に花見とは、その暢氣さが憎らしい」

「暢氣でも道樂でもない、この度京を去れば再び都の花が見られるやら見られぬやら」

良春はホロリと涙をこぼしました。

芳野は良春の心持を引き立てやうとして、その翌日はまだ幾らか早い嵐山の花を見て京の名残を忍ばんとします。

千光寺の欄に凭れた良春が、

「芳野さん、此の下を流れる川を知つてゐますか」

「知つてゐますとも、これは保津川、あちらは嵯峨」

「嵯峨といひますと、瀧口と横笛の事を思ひ出しますね」

「あい、平家物語にあの美しい文章を、わたしは暗記してゐますわいな」
良春は小聲で瀧口のところを口ずさみました。

比は二月十日餘りのことなれば、梅津の里の春風に、よその匂ひもなつかしく、大井川の月影も、霞にこめて朧なり、一方ならぬあはれさも、誰故とこそ思ひけめ、往生院とは聞きつれども、定かに何れの坊とも知らざれば、此處に休らひ、彼處にイミ、尋ね兼ねるぞ無慘なる、住み荒したる僧坊に念珠しけるを瀧口入道が聲と聞き澄まして、御様の變りておはすらんをも、見もし見え参らせんが爲に、妾こそ、これまで参り候へと、具した

る女に云はせければ、瀧口入道胸打ち騒ぎ、あさましさに障子の隙より覗きて見れば、裾は露、袖は涙に打ちしほれつ、少し面瘦せたる顔ばせ、誠に尋ね兼ねたる有様、如何なる大道心者も心弱くなりぬべし。

この美しい文章を口ずさんでゐるうちに良春は、獻款をして、
「あゝ、あの瀧口入道も女故に武士を捨てました、思ひ合すれば年も十九の私と同じ……」

遂に咽び入りました。芳野も、それを聞きながら悲しくなつて泣いてゐました、

「いゝえ、いゝえ、あの瀧口は横笛との中を割かれて果敢ない戀の終りになりました、それに引かへて、二人の戀は誰も妨げる者がありませぬ、わたし達は幸福でございます」

「いゝえ、瀧口は戀を捨て、法の道に入り、高野へ登つて行ひ澄まされました、それであるのに、私は、私は、教を捨て、戀に囚はれ、高野を下つて無間に落ちました、私の行く先は眞闇でございます」

『それではお前、戀を捨て、また佛の道に入りたいか、それほどに、わたしといふ者がお忌か、お前は、わたしを捨てる氣か』

『何の、お前を捨てられる位なら、何で、私がこんなに苦しい思ひをするものか、それにつけても、私はあの兄弟子の良道殿が慕はしい、一日でも、あんな清淨な心になつて、行ひ澄ましてゐたら、どんなに楽しいことだらうと、それを考へぬ日とはありません』

『あゝ、やつぱり、お前は妾といふ者が厭になつたのぢや、わたしに飽きが來たのぢや、あゝ妾の行末、淋しい』

芳野は欄に袖を押し當て、よゝと泣きました。

十七

興山寺の學道のもとへ、名倉の名主甚内が伺候して、密談がはじまります。その密談の要領は、この度、辨天堂建立の應募金が多額に集まつてゐるのを甚内が流用して、各方面へ貸しつけて其の頭を刎ねやうといふ魂膽です。學道も要領を得てゐるが、たゞ一つ困るのは、大徳院の宥乗です。あの老僧あるが爲に、兎角學道が煙たくて堪らない、宥乗さへなければ、募集金の流用も、山林の拂下げも思ひきつて斷行出来るものを、それがあつた爲に、思うやうに行かない。そこで、密談の趣向が陰險になつて、學道の心では、どうがなして大徳院を無き者にせんと腹が讀めてゐるから、甚内が一層隙を進ませたわけです。

自分の弟に、京都で醫者をしてゐるのがある、その手からそつと一服を都合してといふやうな事を口走るのを見れば、多分、二人が腹を合せて大徳院を毒害するつもりと見えます。

享保五年の春の初めに、興山寺の學道が堂上方へ御機嫌伺ひの爲とあつて京都へ上りました。その時のお伴の中に、紀の川の渡場に渡守をしてゐた仁三といふ者があります。これは腕ぶしも強いし、理窟も、ちよつと解つてゐるといふ遊び人肌の男で、名倉の甚内に取り入つてゐたから、甚内が學道にすゝめてお供の中に差し加へたものです。

この男がお伴をして京都へつくと、學道から醫者の篤庵の處へ手紙を持つて行けと云はれたものです。手紙を持つて行くと歸りには薬をよこされたものです。この仁三がその手紙と薬とに何かの細工をして届けたのを誰も氣がつきま

せんでした。

興山寺學道は京都に逗留すること十日ばかりにして山へ歸りました。京都に於ては、それぐ權門勢家へ取り入り、邪魔になる大徳院宥乗を亡き者にすべき毒薬を求めて來たものと見えます。

併し、その毒薬が一向利かなかつたのが不思議です。當の大徳院は二日ばかり下痢をしたといふ噂があるだけで、あとは、ケロリとしてゐたから、學道も甚内も、拍子抜けがしました。たゞ、その時に、蔭で冷笑ひをしてゐたのは渡守の仁三です。

けれども、彼等の計畫は着々と進んでゐる處へ、

「御前様、江戸表寺社奉行、松平修理太夫様御配下、渡邊宗七殿外二名、お役向により當所へ出張になりました」

「ナニ、寺社奉行」

學道の面の色が少しく變りました。

「粗忽の無いやうにお通し申して置け」

寺社奉行より役人出張は、たしかに大事件でした。興山寺學道が面の色を

變へたのも無理はありません。

程なく、學道自身、寺社奉行よりお訊ねの筋を蒙つて江戸へ下らなければならなくなりました。

十八

江戸へ召し寄せられた興山寺の學道が今日は寺社奉行松平修理太夫の手によつて、正式に訊問の日であります。

「紀伊國高野山總分方興山寺學道、役目なれば言葉を改める」

呼びかけた寺社奉行お月番松平修理太夫忠音は、その時まだ二十二歳の若手でありました。吉宗公より特別の命を蒙つて此の度の取調べの大役に當ることとなり、後見には松平對島守近禎、牧野讚岐守英成の兩奉行が控え、書役、目安方等が形の如き有様です。

「高野山寺領内の政治向に就て、其の方に相尋ぬる」

修理太夫が爽やかな口調で訊問を開始すると學道は首を下げ、

「ハ―ハ」

と畏まつたけれども、どうも、内心には何をこの青二才の若輩者がといふ氣色が閃めいてゐないではありません。

「如何なる御たづねに亙りませう、身に覚えあることならば委細申開きを仕り

まする』

『然らば相尋ぬるが、その方寺領内の年貢の取立方、法度の外、一石につき二升づゝの差口米と稱へて隠税を取上ぐるといふ訴へを聞くが如何なものぢや』
 『仰せではござりまするが寺領内の取立方、愚僧に於て總領は致し居りまするものゝ、細事はそれ〴〵下役に於て當て行つてありまする、仰せの如き事實は毛頭之れなき事と信じますが、多数の役僧、多年のうちには、或は計らずして左様な行違ひあるやも計られませぬ、その邊は篤と取たゞしの上、御返答を申上げるでござりませう』

淀みなく答へ終ると、修理太夫の二の矢がつかれる。

『尚はその上に米一荷三斗につき、二合又は三合づゝ、荷毎に取上げると申す、その儀も近來こと更に増長致し、一荷につき五六合は取上げると申すが、此の

儀は如何に』

興山寺學道は、こゝにも亦平然として、

『こは思ひもよらぬ、誰人が左様な謂はれなき訴へを試みて、取るにも足らぬ領内の小事を事々しく天下の評定所にお訴へ申せしや、取立とても人間の爲す所、多年の間には、何等の間違無しとは申されませぬ、若し、領内にて、その邊の事を發見致しなば、穩やかに拙僧へ申告げ來らば、屹度取たゞして、過ちは改むべきに、畏くも天下の評定所を煩はし奉るとは、言語道斷の卑劣な振舞、これと申すも、一に學道が徳の至らぬ處、早速に取調べて、糺彈致すべきは糺彈し、改むべきは改めて、御返事を申上げんと存じまする』

神妙に頭を下げると、修理太夫の訊問がモウ一つ進んで、

『次に相訊ぬるは、領内島野村名主戸谷新右衛門なる者の郷土格取上げの儀は

何等の罪あつてにや、その仔細を申して見よ』

學道は、騒がぬ面をして答へました。

『左様なこともござりましたやうに覺えまする、その次第は彼新右衛門、先祖よりの門閥に誇り、些やかな事を申し募りて領内の百姓を煽動致し、地頭を蔑ろに致し、やゝもすれば政道を亂すやうな振舞のみ致しまする、最初のうちは大目にも見て居りましたが、彼が増長容易にやまず、捨て置かば百姓一揆に類する暴動も致し兼ねまじきにより、民百姓への見せしめの爲に郷士格を取り上げました次第にござります』

巧みに云ひ反らして、淀みなく答へて退けるので、列席の松平對島守、牧野讚岐守等も舌を捲いて、その膽力と辯舌に驚き、却つて調べ役の修理太夫、彼が爲に吞まればせぬかと心配してゐた位でありました。

その時、容をたゞした修理太夫が、

『興山寺學道、唯今まで相たづねし儀は、其方收納方を掌る云は、私の領内の事、改めて相訊ぬる儀は天下御政道に關する大事である、包まず申開けよ』

清く澄み渡つた聲、さすがに酒井左衛門尉忠次が孫、八代將軍のお目がねに叶うた大公儀の寺社奉行としての男振が備はるのであります。

そこで、學道も何となく薄氣味悪くなつて、

『はゝッ』

と頭を下げてゐると、

『學道、その方に見すべき一品がある』

この時、目安方が興山寺學道の前に突きつけたのは一箇の樹であります。その樹といふのは云はでも知れた讚岐樹。これを眼の前へ突きつけられて、さす

がの學道が腹の底へズーンと來ました。けれども其れが面に現はれるほどのこととはなく、

『此れは如何なる品でござりまする』

恍けて、その榊を事ありげにながめてゐると松平修理太夫が、

『それは榊ぢや、讃岐榊と申し、天下御法禁の榊であるぞ』

『はゝあ、して此の讃岐榊を拙僧に拜見仰付られまする思召は』

『學道、その方、手に取り上げて、榊に打たれた焼印を見るが宜い、興山寺收納方の六文字に覚えがないか』

『はゝゝッ』

學道は、わざと其の榊を取り上げ物珍らしげに打ち返してながめてゐましたが、やがてニツと笑ひ、

『仰せの如く、興山寺收納方の六文字……イヤもう巧みに偽造したものにござりまする』

『ナニ、偽造とな』

松平修理太夫も思はず意氣込みました。興山寺學道が、偽造と云ひ捨て、冷やかに笑ひ捨て、しまつた其の度胸に呑まれたものか知らん。併し、學道は表面にさも神妙らしく、

『御意にござりまする、年貢米上納に京判榊を用ひまするは天下の御常法、其れを破りまするは天下の大罪人、苟も佛法無雙の靈地高野山の領内に於て左様な異法を用ゐやう道理がござりませぬ、若し萬々が一斯様な儀がありましたとしても、其の異法榊に寺名役名等を麗々と焼きつける呆氣者がござりませうや、天下の御奉行様、左様なお取り上げは恐れ乍らお戯れかと……』

學道が伏目になつて修理太夫の面をかゞつて、チロリと列席の方まで見廻したものだから、どうしても、これは相撲が違ふと並みゐる人々をハラ／＼させました。

『控へろ、興山寺學道』

さりとて修理太夫も少しも後れてゐるのではありません。

『然らば、こゝに其方と對決申しつける者がある、誰ぞ、戸谷新右衛門を此れへ』

そこで、はじめて興山寺學道の面の色が少しく變りました。滿廷が片唾を呑んで見てゐると、そこへ足輕が切戸から白洲へ引立て來たのは誰あらう、高野の義人戸谷新右衛門であります。

繩付で白洲に引かれた新右衛門は、命せられた處へ座ると、先づ爛々たる眼

光で睨みつけたのが椽の上の興山寺學道の面です。學道に取つても此の新右衛門ばかりは、たしかに苦手です。祖先以來、領内に住んで政治向の微に入り細にわたることまで心得てゐる新右衛門です。學道の爲せることの一から十までを調べに調べ上げて知りつくしてゐる島野村の名主です。何にも知らぬお殿様の修理太夫をあしらうのとは少し呼吸が違ふものだと思得ないわけには行きません。そこで彼は物すごい面をして戸谷新右衛門を睨みつけてゐます。

改めて松平修理太夫が、戸谷新右衛門を正面に立て、自分が行司役に廻つたのは上手であつて、且、效果の擧るべきやり方でありませう。修理太夫の爲に憂へた先輩達も此の捌きぶりにホツと息をつきました。

併し、その次に來るべき相撲が如何に激烈に火花を散らすかは豫想さるべきことです。

十九

それより幾日かを経て見ると、裁判の結果がまた意外なことになりました。何故かと云へば、例の興山寺學道が、單に政治向不行届のお叱りを受けただけで、未だ罪を問はれずに一旦山へ歸つて政治向を整理せよとの至極寛大な仰せを蒙つたからであります。

一方、戸谷新右衛門は直訴の大犯罪によつて當分入牢の上何分の御處刑を待つといふ結着らしい。

これでは、餘りに腑甲斐がない、戸谷新右衛門が身命を賭して江戸へ來て直訴まで企てた犠牲の意味を成さない。興山寺學道を訊問の筋の爲にわざ／＼江戸まで呼び寄せた主意が徹底しない。齒切れの悪い不得要領な裁判ぶり、や

つぱり若輩である松平修理太夫の器量を上げたものとは思はれません。

況して、興山寺學道は、幾日かの所勞の後、無事でぬけ／＼と本國へ歸つて行くのです。どうも齒痒くつて堪らない、さりとて、興山寺も亦必ずしも、舌を吐いて、馬鹿奴！と云つては歸りませんでした。何か無量の不快を蓄へて、心中快々として歸山の途に就きました。

さても、當の裁判官、松平修理太夫忠音は此の事件の一段落を機會として、時の町奉行大岡越前守の屋敷を訪れました。寺社奉行は十萬石以上、町奉行は三千石の格式に過ぎない、併し、修理太夫が越前守の許へ行くのは師の許に教を請ひに行く態度であります。

『この度の御事件は、なか／＼の難物ゆゑ、御心勞のほどお察し申す』
越前守は修理太夫の勞をねぎらつて力をつけてやる意味の言葉で、この度、